

---

# 夜天の主と情報 4 課トリオの愉快的な事件簿

G P S

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜天の主と情報4課トリオの愉快な事件簿

### 【Nコード】

N6802I

### 【作者名】

GPS

### 【あらすじ】

JS事件が終わり機動六課が解散して2年後。フリー捜査官として働いていた八神はやて元に新たなロストログア確保の話が舞い込んだ。

捜査員として組むことになったのは管理局の中でも問題視されている部隊、情報部4課の3人。

1人の真面目な捜査官と3人の珍妙な捜査員。

そして、その4人を取り巻く人達の物語。  
始まります！

## 第1話：プロローグ（前書き）

初めまして、GPSと申します。

大した文章力も無く更新速度も遅いですが、温かい目で見てください。これはこれ幸いです。

## 第1話：プロローグ

「…はあ〜」

薄暗い廃墟ビルの狭い通路に白と黒を基調にした騎士甲冑を身に纏った女性、八神はやての溜め息が響いた。

「なんでこんな事になつとるんや?」

額に手を当てうなだれるはやて、理由は彼女の目の前に広がる光景にあった。

鼻から血を出してうつ伏せている人、壁にもたれ掛かっている人、白目を剥いて伸びている人などざっと見積もっても20人程が横たわっていた。

「滅茶苦茶やつて聞いとつたけど、まさかここまでとは思わんかったなあ…」

倒れている内の1人に手を伸ばしてみるはやて、どうやら気絶をしているだけで死んではないようだ。

「はやてちゃん!」

「リン、どないしたんや?」

通路の先から彼女のユニゾンデバイス・リンフォースツヴァイがやって来た。

「先行している3人からの伝言です、気絶させた人たちをはやてち

「やんと私で拘束しておいて欲しいそうです。」

「…了解や。」

ラインの伝言にはやては渋々了承した。

「まあ楽させてもらってるから文句は言えん立場ではあるけど…」  
「それはやりすぎやと思うぞ。」

バインドをかけながらぶつぶつと文句を言っはやて、そこへ通信が入った。

『ミーオネルです、隊長聞こえていますか?』

「SOUND ONLY」の文字が浮かび上がったウィンドウからは明朗な女性の声が流れてきた。

「聞こえとるよ、何かあったん?」

疲れ気味な声で答えるはやて。

『はい、主犯格を捕まえましたのでご報告です。そちらの方はいかがですか?』

「いかがが…私もラインも自分達が伸した奴らにバインドかけとるだけやしなあ…」  
「ですう…」

ミーオネルとはまるつきり正反対の低い声で話すはやて、その横で浮いているラインもどことなく不満気味である。

『まあ今回は隊長が私達の実力を見るための任務みたいなものです』

し……』

はやての不満な声にフォローを入れるミーオネル、するとその後ろから軽薄な男の声が流れてきた。

『そうそう、僕等が出向する前の部隊で残っていた仕事だったし、わざわざ隊長が出張る必要は無かったんだよ？まあ色々援護してもらった僕等が言える立場ではないんだけどね！』

「わかっとなるよ、今回は私が志願した事や、どんな役回りでも文句は言いたくは無いです。」

男の言葉に溜め息混じりに言うはやて。しかし次の瞬間怒号をあげた。

「せやけどな、これは明らかにやりすぎや！」

『やりすぎ？気絶させた事ですか？』

はやての言葉に疑問の声をあげるミーオネル。

「違う、気絶させる方法や！非殺傷設定の魔法でやればええのに、なんでわざわざ物理的な外傷を与えて気絶させたんや？」

『ああ……』

はやての言葉に納得するミーオネル。そして少し間を置くと通信を続けた。

『まあその事に関しては任務が終わった後と言うことで、この地区担当の部隊にはもう報告は終わってますので犯人と押収品を引き渡したら合流して地上本部に戻りましょう。』

一段と明るい声で言い放つミーオネル、その声にはやては呆れた顔

になった。

「了解や、本部に戻ったら色々と話してもらおうかな？」

『はい、お任せ下さい！それではまた後ほど。』  
通信が切れるとはやては酷い疲労感に襲われた。

「はあ……」

そして今日何度目になるかわからない溜め息を吐くと天井を見上げて呟いた。

「なんでこんな事になったんかなあ……」

## 第1話：プロローグ（後書き）

如何でしたでしょうか？

オリジナルキャラクターの設定等は後々やろつと思えます。

感想・ご指摘・ツッコミお待ちしております。

## 第2話：事の発端（前書き）

少し時間が過ぎます。

## 第2話：事の発端

（時は遡って4日前）

・ 時空管理局本局・執務室・

「失礼します。八神はやて二等陸佐、入ります。」

敬礼をしながら執務室に入るはやて、部屋のソファーには白髪に白い髭を蓄えた恰幅の良い男が座っていた。

「よく来たね、さあ座りなさい。」

「はい、失礼します。」

男の優しい声に促され対面に座るはやて。

「挨拶が遅れたね、ロレンツォ・ザウバーだ、よろしく。」

「はい、よろしくお願ひします。」

笑顔で握手を交わす二人。しかしはやての動きは少しぎこちない。

ロレンツォ・ザウバー

管理局穏健派筆頭格の1人で2年前の年度始めにミッドチルダ地上本部から本局へ異動、57歳、階級は少将

「はっはっは、そんなに畏まらなくても良いんだよ。どれ、ちょっと待っていなさい。」

すっと立って奥の部屋消えるロレンツォ。  
暫くしてトレイにケーキと紅茶を乗せてやって来た。

「どうぞ。」

「え？あ、い、いただきます。」

いきなり薦められて戸惑いながらも一口食べるはやて。

「…どうかな？」

顔をのぞき込むように聞くロレンツォ。

「美味しいです！これ奥様が作られたのですか？それとも少将自ら？」

「いやいや、部下だよ。」

はっはっは、と豪快に笑いながら続けるロレンツォ。

「出勤の途中で貰ってね、『副官と一緒にどうぞ』と言われて渡されたのだが、流石に二人で1ホール重くてね。まったく歳のことも考えて欲しいものだよ。」

「なりほど…」

ロレンツォの言葉に苦笑いを浮かべるはやて。

「さてと、そろそろ緊張はほぐれたかね？」

はやてがケーキを食べ終えた頃を見計らって言葉をかけるロレンツォ。

「え？あ…はい。」

「うむ、では本題に入ろう。」

部屋が少し暗くなりモニターが現れる。

「まずはこれを見て欲しい。」

映し出されたのは槍を手に持った少し大きな全身鎧だった。

「これは？」

「数日前にクラナガンから数十km北に行つたところの森で確認された物だね、見つけた局員が接近したら攻撃を受けたんだよ。」

その時交戦した局員のデバイスからの映像が再生される。

交戦している局員が射撃系の魔法を使っているため全身鎧は槍を使わず籠手の部分から雷撃の様なものを放って応戦していた。

「応援がやってきたところで転移されてね、そのおかげで交戦した局員は軽い怪我で済んだのだが…ああここだ。」

転移の魔法陣が展開されているところで映像が止まる。

「この魔法陣は…ミッド式ですよね？」

「うむ、多少のアレンジのようなものは加わっているがね。」

手元の端末を操作しながら答えるロレンツォ、モニターには2つの魔法陣が並んで出てきた。

「これを見たまえ。」

「左は一般的なミッド式の魔法陣ですね。」

「そう、そしてこっちが先程の映像に出てきた魔法陣だ。多少の差異はあるがミッド式の派生系である事は間違いない。」

さらに端末を操作するロレンツォ。すると、はやてから質問が飛んできた。

「魔法を使うということは中には魔導師が居るということですか？」

はやての言葉に無言で眉をひそめるロレンツォ。

「私も初めはそう思ったのだがね、交戦した局員の話によるとアレの攻撃には人の意思みたいな物は無く機械的だったとの事だ。まあその事に関してはこっちを見て欲しい。」

ロレンツォが言い終わると同時にモニターには1つの資料が出てきた。

「無限書庫に在った資料でね、名前は「ゴリアテ」、兵器型のロス  
トログアとして新暦12年に指定されたと記録には残っている。」

次の資料をモニターに映す。

「見つかったのは37管理外世界の古代遺跡。遺跡の調査中に何故か起動して調査員に重傷を負わせて消えたという記録も残っている。  
ゴリアテという名前は石碑に刻まれていた名前らしい。」

モニターが消えて部屋が明るくなる。

「今回君にはこのゴリアテの確保、もしくは破壊を頼みたいのだが。」

「

「破壊ですか？」

きよとんとするはやて。

「うむ、どうしても確保が困難な場合は完全に破壊してしまつて構わない。引き受けてくれるかね？」

「はい。あ…でも…」

手を組んで聞くロレンツォ、対してはやては少し複雑な顔をしている。

「…何か懸念がありそうだね？」

「あ、いや…その…」

口ごもるはやて、少し間を置くと思つたように口を開いた。

「あの、厚かましいと思うのは重々承知でお願いします！少将の部隊を貸して下さい！」

立ち上がつて深々と頭を下げるはやて。

現在はやてはフリーの捜査官なので自らの部分を持っていないのだ。

「ああ構わないよ、1部隊丸々とはいかないが1小隊を君に貸そう。」

快諾したロレンツォは懐から一通の封筒と地図を取り出した。

「その地図の場所にいる一番ガタイの良い男に渡しなさい、力になつてくれる…はずだ。」

「はず、ですか…」

言葉を濁すロレンツォ、はやては首を傾げた。

「まあ大丈夫だとは思うがな…では、君の働きに期待しているぞ！  
八神はやて二等陸佐！」

「はい！」

互いに敬礼をするとはやてはそのまま執務室を後にした。

## 第2話：事の発端（後書き）

たったこれだけの文章を書くのに一週間：

やはり他の作者の方々は素晴らしいですね。

ご指摘、つつこみ等々お待ちしております。

### 第3話：不安の種（前書き）

どうも、GPSです。

知り合いにこの小説を見せたところ、「小説って言うよりはもの凄く下手な台本」と言われてしまいました。

こういう書き方しかできないんです…

それはさておき、今回の話には他の作者さんのキャラが出てきます。誰が出てくるかは読んで見てからのお楽しみで…

### 第3話：不安の種

・時空管理局本局・廊下・

「うーん…」

ロレンツォの執務室を後にしたはやては渡された地図を見て唸っていた。

「地上本部の部署は大体把握しとるつもりやったけど、ここはどこや？」

独り言を言いながら地図とにらめっこをするはやて。地図には階数と道筋は書かれているが部署名が書かれていなかった。

「リインなら知つとるかな？」

制服のポケットに地図をしまつて歩く速度を上げるはやて、そのままリインを待たせているエントランスホールへ向かった。

・エントランスホール・

「凄いです！大出世ですう！」

エントランスホールに着いたはやてがまず聞いたのははしゃぐリインの声だった。

「リイン…声が大きいってば…」

「だって、リインはとっても嬉しいですよ〜あっ！」

銀髪の男性局員の周りをふよふよと浮遊していたリインははやてを見つけると一目散に飛んでいった。

「はやてちゃんお帰りです！」

「ただいまリイン。誰と話してたんや？」

「はやてちゃんもよく知っている人ですよ」

リインの言葉に首を傾げているときままでリインと話していた男がはやての元に向かってきた。

「はや姉、久しぶり。」

「ウイズ!？」

意外な人物の登場に驚くはやて、そんなはやてをリインとウイズはここにこしながら見ていた。

神崎ウイズ

はやての弟で2年前まで機動六課に所属、JS事件を解決の立役者の1人で。現在は112陸士部隊に所属している。21歳。

「久しぶりやなあ〜でもなんでウイズがここにおるんや？」

「部隊長が査問会に呼ばれてさ、そのの付き添いだよ。」

頬を掻きながら説明するウイズ。

「査問会って何をやったんや!？」

「うーん…それがよくわからないんだよね。一昨日いきなり連絡があつて来たんだけど…」

腕を組んで悩むウイズ、そこへリインが割って入った。

「それよりもはやてちゃん、ビッグニュースですよ！」

「ビッグニュース？」

ラインの言葉に顔を傾げるはやて。

「はいです！なんと…ウイズが部隊長補佐に昇進したですよ！」

「へえ…ええ!？」

大袈裟に驚くはやて、そんなはやてを見てラインは喜びながら2人の周りを飛び回っている。

「うそやん!？」

「いや本当だよ!？階級も一等陸尉になったし。」

「ほんまに？ア、アテナ！ほんまにウイズが部隊長補佐になったんか？」

《ええ、本当ですよ。》

ウイズのネットクチェーンにかかるアテナに確認するはやて、アテナもあっさり肯定した。

アテナ

ウイズが使うデバイスの1つで女性型の人格型アームデバイス。待機状態は指輪でネットクチェーンでウイズの首にかかっている。

「はあ〜小隊長になったのは知ってたけど、まさか部隊長補佐やなんて…」

《正確に言えば、部隊長補佐兼小隊長というポジションです。》

未だに信じられないという顔をしているはやて。

「大出世や…ちゃんと勤まるんか？」

《さあ…ご存知の通り相棒はヘタレですからね。》

「せやなあ…未だに射撃は苦手らしいし？」

辛辣な事ばかり言うはやてとアテナ、ウイズの顔がどんどん暗くなる。

「なんか…俺自信なくなってきた…」

どどん落ち込むウイズ。

《だ、大丈夫ですよ相棒！ほら、この間だって模擬戦に勝ったし、何より部隊長からのお墨付きも貰ったじゃないですか！》

「そうよ…ちゃんと実力を見て抜擢したんだから自信持ちなさい？」

アテナのフォローに付け加えるように若干やる気の無い女性の声が聞こえてきた。

「はあい八神、久しぶりね。」

やってきたのははやてより頭一つ大きい金髪ポニーテールの女性、口には棒付きの飴を銜えていた。

「アイリス二佐、お久しぶりです。」

「ええ、リインも久しぶりね。」

「はい！久しぶりですう…」

敬礼をするはやてとリイン、アイリスはポケットから小さめの金平糖が入った小瓶を取り出すと一粒リインに渡した。

「うわい！ありがとうございます、アイリス二佐。」

口の中に入れて幸せそうにゴモゴモと転がすリイン。

「毎度毎度すいません。」

「気にしなくていいわよ。」

舐め終わった飴の棒を携帯灰皿に入れながらにっこりと笑うアイリス。

アイリス・テーマ

112地上部隊の部隊長。見た目は温厚な印象の女性だが姉御肌で激情家のバトルマニア。戦闘になると声を張り上げて命令や激を飛ばす豪傑。35歳。階級は二等空佐。

「お疲れさまです部隊長、どうでしたか。」

「どうもこつも無いわよ、査問が始まったかと思えばタカ派の連中はやれ越権行為だとか監督不足だとかこつちを糾弾する事ばかりよ。」

ウイズの質問にうんざりな顔で返すアイリス。

「越権行為って一体何の事で査問されたんですか？」

「あれよあれ、一週間くらい前の森で逃した…」

「ああ…あの甲冑の事で呼ばれたんですか？」

頭を掻きながら話すアイリスとウイズ、それを聞いていたはやては「あつ…」という声を漏らした。

「アイリス二佐、その甲冑ってもしかしてゴリアテって名前じゃな

「かったですか？」

「ああ…なんかそんな名前だったわね、ってなんであなたが知っ  
んのよ八神？」

ぐつとはやてに顔を近づけて訝しげに質問するアイリス。はやては  
少し後ずさる。

「あの、その、今回私が対策部隊を動かすことになりました…」  
「あなたがねえ…」

たじろぐはやて、アイリスは顔を引いて言葉を続けた。

「いつ決まったの？」

「ついさっきです。」

「任務内容を簡潔に。」

「ゴリアテの確保もしくは破壊です。」

アイリスの顔が険しくなる。

「部隊の人数は？」

「詳しくは知らされてませんが、小隊規模と言われました。」

「後見人は？」

「えっと…ってなんで私が尋問されているんですか？」

つつこむはやて、アイリスははやてに詰め寄る。

「これで最後だから答えなさい。後見人は誰？」

明らかに怒気を孕んだ声で言うアイリス。

「…ロレンツォ・ザウパー少将です。」

若干震えた声で答えるはやて。やりとりを見ているラインとウィズも震えている。

「な〜んだ、ロレンツォ少将か。なら大丈夫ね。」

「…へっ?」「」

先程とはうって変わってあっけらかんとした表情になるアイリス。震えていた3人は呆気に取られている。

「ちよっ!―一体何だったんですか?」

「本当ですよ!無茶苦茶怖かったですよ部隊長!」

「ですう…」

三者三様につっこむ。ラインに至っては半泣き状態だ。

「な…何よ、別に大した事じゃないわよ?タカ派の誰かだったら上に報告しなきゃって思っただけよ。」

総つっこみを受けてシュンとするアイリス。

「でも、なんでロレンツォ少将なら大丈夫なんですか?」

「ああ、それはねはや姉、112陸士部隊の後見人がロレンツォ少将だからだよ。」

はやての疑問に答えるウィズ。

「しかし小隊規模か、どの部隊から出向するのかな?」

「せや、その事で聞きたいことがあるんよ。」

ポケットから渡された地図を出すはやて。

「ここなんやけど、ウイズここに何かあるか知っとるか？」

「うーん…地上本部なのはわかるけど…どこだろう？」

首を傾げるウイズ。

「ここってあそこじゃない？情報4課。」

ウイズの後ろから地図を見てアイリスが言う。

「情報4課って…それ本当ですか？」

「うん間違いないわ、情報4課のオフィスよそこ。そうか、4課なら小隊規模の部隊しか編成できないわね、人数少ないし。」

はやての驚きをよそに納得するアイリス。

「情報4課って…思いつきりハズレやないか…」

酷く落胆するはやて。

「うーん…八神、もしかして局内で流れてる4課の情報を鵜呑みにしてんの？」

渋い顔をするアイリス。

「だって、あそこは管理局の中でも落ちこぼれや問題を起こす人達が集まってるって…」

「たしかに問題になるのはいるわね、特に課長とか。」

元気がないはやてに笑いながら言うアイリス。

「でも、個々の能力は結構高めよ。まあ実際に見たほうがわかるわね、騙されたと思って行ってみなさいな。」

「騙されたと思ってですか…」

笑顔のまま後押しするアイリス、はやての心境はかなり複雑になっている。

「さてと…結構長話しちゃったわね、早いとこ戻らないと残業決定になるわ…」

「本当ですね、いつの間にやらしい時間になってた。」

時計を見ながら言うアイリスとウイズ。

「じゃあね八神、あんたならなんとか出来るはずよ、自信を持っていきなさい。」

力強く激励して歩き出すアイリス。

「俺も行くね。また連絡するよ。はや姉、リン、2人とも頑張っ  
てね。」

「うん、ウイズも身体に気をつけるんよ?」

「あまり無理したらダメですよ?」

微笑みながら言うはやてとリン。

「ははっ、解ってるよ、じゃあまたね。」

片手を上げて応えるとウィズはアイリスを追って歩いていった。

「さて…帰ろうかリン。」

「はいです…！」

リンと一緒に歩き始めるはやて。

「とりあえず…明日行くだけ行ってみよう、全てはそこからや…！」

### 第3話：不安の種（後書き）

と言うわけで、ゲストキャラクターは『魔法少女リリカルなのはS  
trikers With』より神崎ウィズ君です。  
許可して下さいました八神煌斗さんありがとうございました。これから  
もちよいちよい使わせていただきます。

次回、ようやくミーオネル以外の情報4課トリオの御披露目です。

#### 第4話：情報4課へ（前書き）

え、「こんな駄文を書くのに何日かかっているんだ!？」と言われ  
そうなくらい遅くなりました…

とりあえずこの話でメインのメンバーが揃いますが、フルネームは  
まだ1人しか明かされません…

それではどうぞ！

## 第4話：情報4課へ

- 地上本部 -

「この先やね…」

薄暗い廊下を見ながらはやては呟いた。

情報4課は地上本部の倉庫や資料保管庫が密集する一画にあるとされており、この辺りは普段から人の往来が少ない区画のため必要最低限の光源しか備わっていない。

「何か出てきそうですう…」

「大丈夫やリン、ちょっと暗いだけや。」

肩に掴まっているリンの頭を撫でながらはやてはしっかりとした足取りで歩く。

「確かここを曲がって…」

廊下の一番奥を曲がった先には通電していない開閉スイッチがある扉1枚あるだけだった。

「地図によればここなんやけど…」

地図の印と自分の現在位置を再確認するはやて。

「何にも無いですよ？この扉も開きそうじゃないですし…」

開閉スイッチをポンポンと叩きながら言うリイン。

「おかしいな…ここが一番奥やから道も間違いようがないし…」

考えながら扉を調べるはやて。

「駄目や、うんともすんとも言わへん…」

腰に手を当てて溜め息を吐くはやて、すると通電していなかった開閉スイッチが淡く明滅し始めた。

「何や…リイン何かしたんか？」

「リインは何もしていませんよ？」

言葉とは裏腹に慌てる様子も見せないはやてとリイン、とりあえずはやてはスイッチに手をかざした。

「…開かん。」

いくら手をかざしても開く気配がない扉に少しずつイライラし始めるはやて、扉に向かって拳を振りかぶる。するといきなり扉がスライドして中から人が出てきてはやてのパンチがヒットした。

「グッ…」

「あ…」

はやてから見てみぞおちの右辺りに不意打ちをくらいしゃがみ込んで悶絶する男性、殴った本人は拳を突き出した状態のまま固まっている。

「大丈夫ですか？て言うかどれだけ強い力で殴ってるんですか、はやてちゃん？」

「そんな力入れてへんよ！ちょっと小突いただけや！」

あたふたしながら言い合ふはやてとリイン、そんな2人を見ながら男はゆっくりと息を吐き出して立ち上がった。

「あの…何か御用でしょうか？」

平静を装うように低い声で言う男、しかし殴られた場所をさすっているところを見ると相当痛そうだ。

「あ…ごめんなさい…えっと…ロレンツォ・ザウパー少将に紹介されて来たんですけど…うわっ！」

ばつの悪い顔を上げながら話すはやて、しかし男の顔を見た瞬間その表情は驚きに変わった。

短髪に眠そうな目をしたその男は、はやての頭2つ分程大きな身長で割合がっしりとした体格しているが、頭には痛々しい包帯が巻かれ、右の頬には大きめの絆創膏が貼られていたのだ。

「ロレンツォ少将と言うことは用があるのはガルドさん…課長ですね、そろそろ帰ってくると思うのでお入り下さい。」

男はスツと身を引いて2人をオフィスに通すと手動で扉を閉じてはやて達の方へ向き直った。

「奥のソファーに掛けて待っていて下さい。」

「あ…はい。」

男に言われたとおりオフィスの奥にあるソファ―に腰を掛ける。

通されたオフィスは通ってきた通路とは違って変わって照明も明るく清潔感があった。

「廊下の雰囲気とは全然違いますね。」

部屋の中を見回してボソリと呟くリイン。

「リイン！そんな事は言うたら「チツ…」あか…ん…」

リインをたしなめている途中で舌打ちが聞こえ、ゆっくりと振り向くはやて。

視線の先には何かの缶を覗きながら苦々しい顔をした男の姿があった。

「（あかん、あれは明らかに怒ってる…）」

「（もしかしてリインのせいですか？）」

念話で話しながらチラチラと様子をうかがうはやてとリイン、視線の先の男は何かぶつぶつと呟きながら戸棚から別の缶を取り出した。どうやらお茶を淹れているようだ。

「あ…あの…」

「何でしょうか？」

恐る恐る話しかけるはやてに対して作業している手は止めずに淡泊な声で聞き返す男。

「名前を聞いてもええかな？」

「ん？ああ、そういえばまだ名乗ってなかったですね。」

ティーポットに蓋をし一瞬だけ動きを止めて思い出したかのように言うと男ははやてに向かつて敬礼をした。

「時空管理局情報部4課、エイト・ガーラントであります。」

先程よりも張り上げてはいるが、やはり淡泊な声で挨拶をするエイト。し終えるとまた作業に戻った。

〈数分後〉

「お待たせしました、買い置き之物しかありませんがこちらもどうぞ。」

トレイからお茶とお茶菓子を置くエイト。リインの方は配慮をしたのか湯飲みではなくお猪口にお茶が入っている。

「よかつたら一緒に飲みませんか？」

少し無理をして作った笑顔で言うリイン、エイトは何も言わずにトレイを戻しに行くと自分の湯飲みを持ってはやて達の対面に座った。

「えっと…」

「先ほどの言葉に怒っているわけではないので安心して下さい、八神はやて二佐、リインフォースツヴァイ曹長。」

お茶を啜りながら言うエイト、しかし言い方は相変わらず淡泊である。

「本当ですか？」

「ええ、さっきの舌打ちはいつも来客用で淹れている茶葉が切れていて、ついつい出てしまったものですので。」

「良かったです。」

満面の笑みを浮かべるリイン、横のはやても安堵の表情を浮かべている。

「あ…そういうば、まだ名乗ってへんのに何で私が八神はやてやってわかったん？」

「仕事柄ですよ。管理局のお荷物部隊と言うレッテルは貼られています、ここも情報部ですから。」

段々と饒舌になるエイト、心なしか声にも感情が出てきているようだ。

「（なんや、怖い人かと思うたけど案外話せるな。）」

「（ですね。）」

念話で互いに再確認する2人、さらに会話を続けようとエイトの方を向くとエイトはオフィスの隅の方に視線を向けていた。

（何かあるのかな？）

エイトの視線を辿るはやて、その先には自分達が入って来た扉とは別の扉があった。

（扉？）

「このオフィスの正規の出入口ですよ。」

「えっ！？」

重なって聞こえた驚き、エイトは何事も無かったかのようにお茶を啜る。

「ちょお待って、あそこが本当の出入口？」

「そうですね、二佐達を通ったのは非常口であっちが本来の出入口です。」

啞然とするはやてとリイン。

「まあ、ロレンツォ少将は非常口からしか来ませんからね。転送ポイントからだとは非常口の方が近いですし。」

またあつさりと言い放つエイト、はやてとリインは落ち込んで声も出せないでいた。

そんな二人を見ながらふと湯飲みに目をやるエイト、自分のお茶を飲み干すとすつと立ってポットの方へ向う。すると、ちょうど良いタイミングで1組の男女が入ってきた。

「ただいま戻りました、と言ってもエイト君しかいないですけど。」

まず入ってきたのは明朗な声で報告をするエイトより頭1つ半ほど小柄で深い緑のボブカットの女性。制服の上に白衣を羽織っているため少し判りづらいがかなり良いスタイルをしている。

「お？気がきくねエイト、丁度喉が渴いていたんだよ。」

次に入ってきたのはやけに軽い口調の男。エイトと同じくらいの身長だが痩せ形で、肩くらいまでの黒い髪をうなじの所で纏めており

虹彩が見えない程細い眼が特徴的である。

「おかわりなさい、ミオさん、ケイさん。遅かったですね？」

「うん、こっちにフィーアを入れてB分隊と30n3だったんだけどね？なかなか決着が着かなくてね」

エイトの前のティーポットを奪い取って自分のカップにお茶を注ぐ男。どうやらこっちがケイのようだ。

「なるほど。ミオさん、お客さんが見えてるんだけど…ガルドさんは？」

「課長は一服してくるそうです。」

少し呆れながら言うミオ。

「ところで、お客さんはどこに？」

「あーそれ僕も気になる。誰が来てるの？」

若干子どもっぽい仕草でキョロキョロと見回すミオとケイ。そしてソファアで落ち込んでいるはやとリインを見つけた。

「もしかしてあそこでへこんでるのがそっかい？」

ヒソヒソと話すケイ、エイトは無言で頷いた。

「…何があつたんですか？」

苦笑いを浮かべながらエイトに説明を求めるミオ。

「エイト説明中」

「なるほど…ロレンツォ少将も困った人ですね。」

ふうと溜め息を吐くミオ。

「うーん…」

何かを考えながらミオははやての方を見る。すると後ろからいきなり肩を叩かれた。

「よう、帰ったぜ。」

聞こえたのは太い男の声。

「あつ、課長お帰りなさい。」

驚く様子もなくゆっくりと振り向いて対応するミオ、そこにいたのは角刈りで若干強面な筋骨隆々の大男だった。

「あれ？いつの間に帰ってきてたんですか？」

「お前等が話してた途中だよ、てかエイトとケイは気付いてたぜ？素っ頓狂な声のミオに呆れた声を上げるガルド。」

「まったく、お前はもうちったあ……………まあいいか。エイト、コーヒ―淹れてくれや。」

ミオに小言を言おうとするも当人が熟考していたため切り上げるガルド、エイトに一言告げてソファーに座ってはやてと話を始めた。

「ミオさん、どうかしたの？」

コーヒーとお茶のおかわりを持って行ったエイトが問いかける。

「うん、なんで八神二佐程の大物が情報4課うちに来たんだろう?と思  
つて…」

はやてから目線を外さずに話すミオ。

「まあ多分だけど、十中八九厄介事を持ち込んで十中八九僕等に飛  
び火するんだろうね。」

「え〜…ケイ君、そう言う事言うのやめようよ。ケイ君の多分的  
中率高いんだから…」

お互いに眉尻を下げて言うミオとケイ。

「とりあえずそう言う話は置いて、明後日の事を話し合いませ  
んか?」

「了解!」

ホワイトボードを用意しながら言うエイト、ミオとケイは間延びし  
た返事をする。自分達の椅子を持ってきてホワイトボードの前に座  
った。

「しかしエイトも運がないね、復帰一発目が質量兵器の取引現場の  
摘発なんて。」

笑いながら言うケイ。

「えー入手した情報によると取引場所はクラナガンから東の廃墟区  
画のビルですね。」

ケイの軽口をスルーして始めるエイト、ホワイトボードには半透明のモニターが現れビルの見取り図らしき物が映された。

「建物は5階立ての雑居ビル跡、1フロアの床面積はそこそこ有るけど通路が狭いのでデバイスが使えるのはケイさんだけですな。それから…」

確認事項を読み上げるエイト、軽口を叩いていたケイも真剣に話を聞いていた。

#### 第4話：情報4課へ（後書き）

というわけで、オリキャラの『エイト・ガーラント』でした。  
如何でしたでしょうか？

ちなみに一応補足をしておきますと…『ミオ＝ミーオネル』です。

今回はゴリアテの事を中心にやってみようと思います。

それでは！

## 第5話・ゴリアテの持つ機能（前書き）

え、いつも通りのグダグダです。

こんな駄文を読んで下さる皆々様に厚く御礼申し上げます。

## 第5話・ゴリアテの持つ機能

・場面は変わってはやて達・

「……………」

落ち込んでいる最中、目の前に筋骨隆々な男がいきなり座ったためか、はやてとリインは若干放心状態になっていた。

「課長のガルド・マスタング二等空佐だ、よろしくな嬢ちゃん、チビちゃん。」

ニヤリと微笑みを浮かべて言うガルド。

「よ、よろしくお願いします…」

「おう。んで、なんでそっちのチビちゃんはそんな所に居るんだ？」

はやての後ろに隠れたリインを指差すガルド、リインは目に涙を浮かべていた。

「それは…」

「ガルドさんの顔が怖いんですよ。」

良いタイミングでガルドのコーヒーとはやて達のお茶のおかわりを持ってくるエイト。

「何だよ、俺のせいか？」

「ええ、間違いなく。」

お茶を注ぎ終わると自分の湯飲みを回収して戻るエイト、ミオとケイと3人で何か話しているようだ。

「そんなに怖いかな？」

「あの…えつと…リン、ちょお席外しとき。」

「はいですう…。」

はやてに諭されフヨフヨと飛んでいくリン。

ガルド自身は場を和ませるために微笑むのだが、見る人が見れば肉食獣が狩りやすい獲物を見つけてほくそ笑んでいるように見えるのだ。

「まあいいか、んで？ロレンツオ少将からは何か受け取ってんのかな？」

「あ、はい。一応これを受け取りました。」

懐から封筒を取り出すはやて、ガルドは中の手紙を読み始めた。

「…なるほどな、対ゴリアテ部隊を嬢ちゃんを中心にしてうちで作れってか。」

机に手紙を置くガルド。

「はい、任務内容はゴリアテの確保もしくは破壊です。」

「確保ね…確かにアレは兵器以外の流用も出来なくは無さそうだからな。」

真剣な表情で話を始める2人。先に話を進めたのはガルドだった。

「嬢ちゃん、ゴリアテの事はどこまで知っているよ？」

「ミッド式の魔法を使う機械だということくらいです、それ以外は特には知らないですね。」

ゴリアテとの戦闘映像を思い出しながら言うはやて。

「なるほどな…」

納得するように言うガルド、少し間を置いてさらに続けた。

「なんでゴリアテは魔法が使えると思う？」

「なんでってリンカーコアがあるからじゃないですか？」

なぜそんな質問をされたのかと疑問を抱きつつ答えるはやて。

「そうだな、じゃあ何でリンカーコアがあると思うよ？」

「何で…？」

頭を捻るはやて。

「わからねえか？ちなみにゴリアテはどうやら金属と機械部品のみで作られているらしいぜ？」

ガルドの追加情報にはやてはさらに頭を捻る。この人は自分に対して意地悪をしているのではないか？とも思ったがガルドはいたって真剣な顔をしている。

「技術畑出身じゃない嬢ちゃんには難しいか、悪かった。まあ俺もミオからの説明がなかったら納得しなかったからなあ。」

「はあ…？」

頭を掻きながら謝るガルド、はやては腑に落ちない顔をしている。

「最初にいつとくとくな、機械を動かすのはリンカーコアの魔力じゃ無理なんだ。」

腕を組んでまた話をし始めるガルド。

「リンカーコアってのは有機物や魔力で構成された生物…まあ、使い魔や守護騎士特有の物でな機械や無機物にはまず作られない物だ。」

キーボードを呼び出してはやての前にモニターを展開させるガルド。

「魔法を行使するのに必要なのがリンカーコアだ、ぶっちゃけるとリンカーコアが無くなったって人間は基本的に死ぬことはない。使い魔達は…まあ…死ぬってどうか消えてしまっただけだ…」

気まずそうに続けるガルド。モニターには人間と機械のサンプルとしてガジェットドローン1型の映像が映された。

「リンカーコアは高エネルギーを発生させる結晶体でもある、でも1度に放出できる量に対して1度に回復できる量が少なすぎて機械の動力回路として使うのは効率が悪すぎる、だから機械には別の動力回路が埋め込まれるのが通例だ。」

一気に話すガルド、コーヒを一囀含んだ。

「当然ゴリアテにもリンカーコアとは別の動力回路が組み込まれていると見て間違いないだろう。でもそうなるとゴリアテの体内にリ

ンカーコアが存在している理由の説明がつかねえ。そこで仮説を立てた。」

モニターに一枚の資料が映し出される。

「これは？」

「ゴリアテのレポートだ。」

はやての質問に答えながらレポートの重要と思われる部分を次々と拡大するガルド。

「レポート？」

「ああ、正確には新暦12年から17年まで調査チームの1部が遺跡に残って書き上げた調査レポートとゴリアテの資料を元にミオがまとめたレポートだな。ちなみに当時のレポートは第1種指定資料として登録されてる代物だ。」

「……ちよお！第1種指定って本当ですか？」

さらりと言うガルド対してうるたえるはやて。

「何か問題があるか？」

真顔で言い切るガルド。

第1種指定資料とは歴史的または学術的・政治的に非常に価値がある資料であり、閲覧には管理責任者の許可が要る複製不可の資料である。

「参考にただけで複製はしてないぜ？問題は無いはずだ。」

ニタリと笑うガルド、かなりの屁理屈にはやては眉間を押さえた。

「じゃ話を続けるぞ。原本によるとゴリアテには他人のリンカーコアを複製する機能があつてな。」

「…複製ですか？」

呆れかえった声で返すはやて、ガルドは気にせず続ける。

「ああ、しかもリンカーコアだけじゃなくその魔導師の魔力資質や魔術式も複製してさらに行使まで出来るらしい。」

「魔術式もつて…それじゃまるで！」「そうだな、嬢ちゃんの持つ夜天の書にそっくりだ。もっとも、複製した瞬間からマスターが魔法を使えるように自動で魔術式に修正が入る夜天の書と丸々の複製しか出来ないゴリアテじゃ性能が違いすぎるがな。」

鼻で笑うガルド、はやてはレポートを真剣に読み始める。

そして一通りレポートを読み終わると別の書類に目を通していたガルドに質問をぶつけた。

「レポートには先程ガルド二佐が立てたと言った仮説が書かれていませんが？」

「ん？ああ、そいつはまだ書きかけだからな。少将に提出するため書いてるんだが、調べた資料を纏めるのに苦労してな、レポートの作成を始めたのは今朝からなんだ。」

読んでいた書類を閉じてはやての方に向き直るガルド。

「さてと、んじゃ本題だ。立てた仮説つてのは『ゴリアテは魔法の研究用としても造られた』ってもんだ。もっとも、兵器が研究用、どっちかは副産物だろうけどな。」

自信満々に言うガルド。

「研究用って具体的にはどういうことですか？」

「そうだな、例えばこんな風にバインドをかけられたらどうする。」

指先に赤いミッド式魔法陣を展開するとはやての片腕だけにバインドをかける。

「とりあえずバインドの式を解いて外します。」

冷静に解除していくはやて、30秒程でバインドは消えた。

「ほう、なかなか早いな。ちょっと待ってる…」

スツと立ってどこかへ向かうガルド。はやてが言われたまま待っているミオを連れて戻ってきた。

「うちのA分隊長兼デバイスマスターのミオだ。」

「ミーオネル・センチアと申します、以後お見知り置きを。」

深々とお辞儀をするミオ、ガルドはまたはやての前に座った。

「さてと、ミオやってくれ。」

「はい、それでは失礼します。」

手を開いて緑のミッド式魔法陣を展開させるとガルドと同じ様にはやてにバインドをかけた。

「くっ…！」

さつきより強力なバインドに顔を歪ませるはやて、すぐに解除作業に入る。

「ん〜ちよおややこしいな…」

悪戦苦闘するはやて、2分近くかかってようやく外した。

「初見でこのタイムですか、少しショックです。」

落ち込んだ表情をするミオ。

「でも凄かったですよ、戦闘時やったら解除する前にやられています。」

「ふふっ、ありがとうございます。」

バインドがかけられていた腕をさすりながら寝めるはやて、ミオまんざらではなさそうだ。

「でもこれが先程言った研究とどう結びつくんですか？」

「まあ見てな。ミオ、やってくれ。」

今度はガルドの腕にバインドをかけるミオ。

「行くぜ？」

腕に集中するガルド。すると瞬間にバインドが外れた。

「なっ…?」

言葉を失うはやて。

「お見事ですな。」

「おうよ！」

いつの間にか椅子を持ってきて座っていたミオが拍手する、それに短く答えるとガルドは説明を始めた。

「俺たちが使う魔法式は個人個人が理論と数式で構成したプログラムだ、だからバインド1つをとっても若干の個人差が出る。攻撃魔法だったら尚更、それこそ星の数だな。だが所詮は人が組んだプログラム、それを破壊するプログラムを組んじまえばあっという間に無力化できる。」

言いきるガルド。しかしはやてはすぐさま反論する。

「理屈はわかります。けど、使用している言語が違ったりするとそれは無理なのでは？」

「言語が違ってても根幹は同じだ。それにその理屈だと古代ベルカ式を使う嬢ちゃんはミッド式のバインドを解除出来ないってことになるぜ？」

「あ…確かに言われてみればそうや…」

ガルドの言葉に納得するはやて。

「ただ、破壊するプログラムを組むには対象のプログラムを知っておかなければならないという前提がある。でも、苦労して組んだプログラムを他人に教える奴なんて基本的にはいない。さて…そろそろ言いたいことが見えて来たんじゃないか？」

しっかりとはやてを見据えるガルド。するとはやては何かを閃いた

かのように気付いた。

「…そっか！ゴリアテの複製機能や、リンカーコアから魔術式まで複製するってことは解析すれば相手が組んだプログラムを丸々知ることが出来る。違いますか？」

「お見事です！」

「ああ、加えてと強力な魔力資質と魔術式を持った奴のリンカーコアが複製出来ればそのまま戦力として投入も出来るってとこまで気付けばなお良しだ。」

揃って拍手をするガルドとミオ。

「さて、それじゃそろそろ対策部隊のメンバー選出でもすっかな。」

グツと上半身を伸ばすガルド、ついぞと言わんばかりにすっかり冷めたコーヒーを飲み干した。

「あ…ちょっと待って下さい、二佐が初めに言った『兵器以外の流用』については？」

「ん？まあそれは気付いた本人の口から語ってもらおうぜ？俺はちっと疲れた。」

笑いながら言うガルド。はやては苦笑いを浮かべた。

「ちなみに課長、対策部隊には誰を？」

「そりゃA分隊（お前ら）しかないだろう、とりあえず他のメンバー連れてこい。」

「やっぱり私たちなんですね…」

「はあ…」と深い溜め息を吐くミオ、渋々メンバーを呼びに行く。

「ああそうだ、うちは人数少ないから嬢ちゃんにも仕事を手伝ってもらうぜ？その代わりオフィスはここを使えばいい、後でここにいない4課のメンバーも紹介するからよ。」

「あつ、はい…。」

強引に決定するガルド、はやては頷くことしか出来なかった。

## 第5話・ゴリアテの持つ機能（後書き）

如何でしたでしょうか？

しかしあれですね、キャラの名前って考えるのが難しいです…

結局『マスタング』とか『センチア』とか『エイト』とか車名から取ってるし…

一応、後1話で過去の話は終わりにしようと思っています。

## 第6話・対策部隊結成（前書き）

「ほぼひと月かかってこの体たらくか！」と言われるような出来です。

なんて言うか申し訳ありません…

それではどうぞ！

## 第6話：対策部隊結成

- 情報4課・デバイスルーム -

情報4課には課の規模に見合わないくらい立派なデバイスを整備する部屋がある。

位置は出入口から入ってすぐ右側。管理責任者は4課のデバイスマスター、ミオである。

そんなデバイスルームの中では現在エイトとケイ、そして何故かリインの3人が居た。

「うーん本当に見れば見るほど凄い。」

「全くだね、改めて八神二佐の実力を実感するよ。」

リインの事をまじまじと眺めるエイトとケイ、傍から見ればかなり危ない光景である。

「そんなに見られると恥ずかしいですよ。」

まんざらでもない顔で言うリイン。

「ああ…ごめん。いや、でもやっぱり凄いや…」

一度身を引くエイト、しかし再度リインを眺め始めた。

「そんなにリインは珍しいですか？」

「うん、珍しいと言うよりは素晴らしいと言うべきだね。」

首を傾げ問うリインに答えるケイ。

「ユニゾンデバイスをここまでダウンサイジング出来るなんて…カオスにどうにか応用できないかな？」

「カオス？」

エイトの言葉に再度首を傾げるリイン。

「カオスはうちにいるユニゾンデバイスだよ。生まれたのは一年ちよつと前だったかな？良い子なんだけど中途半端にしかダウンサイジング出来ないことを酷く気にしていてね…」

渋い顔でリインに説明するケイ。さらに言葉を続ける。

「もしあれなら、仲良くなつてはくれないかな？」

「はい！リインに任せるですよ！」

胸をドンと叩くリイン。

「ちなみに、エイトさんとケイさんはデバイスは持つてるですか？」

「うん、僕のはこの子だよ。」

左腕につけている腕輪を見せるケイ、腕輪には2cmほどの黒い珠がはめ込まれている。

《フェイロンと申します。主共々よろしくお願いしますね？リインさん。》

優しい声音で挨拶をするフェイロン。

「はい、よろしくです。エイトさんはどんなデバイスですか？」

「ああ…俺のは今修理中で、あそこに居るのがそうなんだけど。」

後ろにあるシリンドーを指差すエイト。中にはケイと同型で白い珠がはめ込んである腕輪が浮いていた。

《ストロームです。》

あっさりとした態度で言うストローム。

《無愛想でごめんなさいねリンさん。この子はとても恥ずかしがり屋なの。》

《なっ！？別にそう言うわけではありません。》

フェイロンの言葉を少し焦り気味に否定するストローム。

《加えて素直じゃないんです。》

《ああもう！姉さんは余計なことと言わないで下さい！そしてその2人は笑わないで下さい！》

さらにむきになるストローム。やりとりを見ていたケイとリンはクスクスと笑っていた。

「…調子はどう？ストローム。」

《え！？あ…はい、メインフレームは無事でしたし破損箇所の修復も終了しています。》

高ぶった感情を抑えながらに報告をするストローム。

《それから、修復にあたりシールドとブースターの規格が変更されています。それにより若干重量が増しています。》

「そっか、スペックは見える？」

《ええ、少々お待ち下さい…》

呼び出されたデータを読み始めるエイト。さらに何かを話し始めた。

一方、途中で話に入れなくなってしまったケイとリイン、そしてフエイロンは3人で話をしていた。

「それにしても、この部屋の設備は凄いですね」

キヨロキヨロと見回すリイン。

《まあいろんなうちにはデバイスがありますから。》

「そうそう、しかもみんな扱い方が荒いから常にフルメンテが出来るように設備を揃えたらこんな感じになったんだ。」

フエイロンの説明に自慢気に補足を入れるケイ。すると、部屋の入り口が開き数分前にガルドに呼ばれたミオが入ってきた。

「エイト君…ケイ君…課長がお呼びです…」

数分前とは違い覇気のない声で告げるミオ。エイトはすぐさま駆け寄った。

「ミオさん、どうしたの？」

「理由はすぐにわかります…そして、今はただケイ君の直感を恨み

たいです…」

エイトの腕に掴まり大きく溜め息を吐くミオ、瞳には涙まで溜めていた。

《毎度のことですが、一言多いのが災いしましたね、主。》

「えっ？何？僕のせいなの？」

自らのデバイスにあっさり裏切られるケイ。そんなケイを放ってエイトは話を進めた。

「まさかとは思いますが…ゴリアテですか？」

「そのまさかです…行ったらすぐに辞令が言い渡されるはずです…」

エイトの胸に顔をうずめて告げるミオ、エイトも落胆の色を隠せないでいた。

「まあ決まっちゃったことは仕方がないよ、とりあえずガルド課長のところへ行つた方が良くないかい？」

「そうですね…」

落ち込んでいる2人とは違って楽天的なケイ。エイトも頷いてミオに話しかけた。

「ミオさんとりあえず行ってみましょう。」

「はい…でもその前に、もう少しこのままでも良いですか？」

上目遣いで問うミオ、エイトは無言で頷くとミオの頭にそつと手を置いた。

《見事に蚊帳の外ですね？主。》

「もう慣れたよ。それにミオだつてご無沙汰なんだ、あれくらいは許容するよ。」

微笑ましく見守るケイ。少しするとミオはエイトから離れた。

「さて、では行きましょう！」

満面の笑みで部屋から出ようとするミオ。しかし、エイトに呼び止められる。

「ミオさん、ストロームはもう大丈夫？」

「え？はい、もう修理は終わっていますからシリンダーから出しても構いませんよ。」

「了解。」

ミオに言われてストロームの方へ向かうエイト、シリンダーからストロームを取り出すと自分の右腕につけた。

《違和感はありませんか？マスター。》

「うん…。」

感触を確かめるように腕を回すエイト。

「特に問題ないね、じゃあ行こうか。」

「はい！」

ミオの返事とともに4人はデバイスルームを後にした。

一方のオフィスではガルドとはやてがガルド用のデスクの前で待ちぼうけをくらっていた。

「遅いな…」

イライラを募らせるガルド。

「遅いって、まだ呼びに行つて10分も経つてないやん…」

横目で見ながらぼそりと言つはやて、不意にガルドと目があつた。

「き…聞こえてましたか？」

「ああ、バツチリな。」

縮こまるはやて、ガルドは腕を組んでデスクに寄りかかった。

「まあ、自分でもこのせつかちなところは直さないとダメだつてわかつてんだけどな…」

溜め息混じりに言うガルド、そこへミオ達4人がやつて来た。

「遅くなりました、A分隊3名揃いました。」

笑顔で報告するミオ、その笑顔を見てガルドは呆れ顔になる。

「いちやつくならなるべく休憩中にしろよ。」

「あ、はい。すみません…」

謝つたのはエイトだつた。

「さてと、まあ薄々感づいているとは思うが、一応略式で辞令を言い渡すぞ。」

ガルドの一言で姿勢を正す3人、オフィス内に一気に緊張が走った。

「辞令！情報部4課実働A分隊の3名にロストロギア・ゴリアテ対策部隊への出向を命ずる！」

「……はいつ！」「……」

声を張って辞令を通達するガルドと声を揃えて敬礼をするミオ達は、はやとリインも真剣な顔をしている。

「まあ色々大変かもしれねえけど、肩肘張らずに頑張れや。以上！」

「……はい！」「……」

一気に緊張感を無くす4課メンバー、はやとリインはずっこけた。

「それから、対策部隊のオフィスは4課こしだからな。これまで通り4課の仕事もしてもらっぞ。」

「あ……やっぱりですか……」

ニヤリと笑うガルド、

ミオがまた落胆する。

「なるべくゴリアテに専念できるようにするにはするから、安心しな？」

笑顔のままミオの肩をポンポンと叩くガルド。ミオは口をアヒルのようになっている。

「その言葉、信用しますよ？ガルド課長。」

ミオの代わりに言うケイ。

「おう！んじゃ後の細々したところはお前等でやってくれ。俺は一服してついでに航空武装隊に顔出してくるからよ。」

手をヒラヒラさせてガルドはオフィスから出て行った。

く少し時間が進んでく

はやてとリインを加えて再度ホワイトボードの前に集まるミオ達。

「では、第1回ゴリアテ対策会議を始めたいと思います。」

ホワイトボードの前に立つて場を仕切っているのはミオ、はやてとリイン、ケイの3人は椅子に座っており、エイトはマーカーを持ってボードに「第1回ゴリアテ対策会議」と書き込んでいた。

「まずは自己紹介ですね。」

パン！と手を叩くミオ。

「なら私達からや。」

スツと立ちあがるはやてとリイン。ミオ達と対面になる位置で姿勢を正す。

「この度、ロストロギア・ゴリアテの対策部隊長に任命されました、

八神はやて二等陸佐です。」

凜とした態度で敬礼するはやて。

「はやてちゃ：八神二佐の補佐をしています、リンフォースツヴァイ空曹長です。」

少したどたどしく敬礼するリン

「至らないところもありますが、よろしくお願いします。」  
敬礼を解くはやてとリン、続いてミオ達が自己紹介を始めた。

「2回目になりますが、情報部4課から出向になります、ミーオネル・センチアー一等空尉です。入局11年目、コールサインはアンバー1です。あっ、出来ればミオって呼んで下さい。戦闘時は部隊指揮と長距離支援を主に行っています。あと、デバイスマイスターも兼任していますのでデバイス関連で相談があればいつでも言っして下さいね。」

ニコニコと微笑みながら敬礼するミオ。

「同じく、リー・ケイラン、ケイって呼んでもらえたらうれしいかな。入局は8年前、コールサインはアンバー2で階級は三等空尉さ。前線での戦闘が僕の役目、これでも前の部隊ではエースだったんだよ？ちなみに歳は八神二佐の1つ：あゝもう誕生日過ぎてるから2つ上だね。日常的な相談ならお兄さんにすると良いよ。」

にやけ顔で得意気に言いながら敬礼するケイ。

「アンバー3、エイト・ガーラント一等空士であります。リー三尉と同じく前線での戦闘と索敵や斥候を主に行っています。入局もリー三尉と同じく8年前です。」

簡潔に終わらせ敬礼するエイト。

「こちらこそ色々と気苦労をかけるかも知れませんが、よろしくお願ひしますね？八神二佐。」

敬礼を解き握手を求めるミオ、はやてはそれに応える。

「ケイさんが私の1つ上ってことは、ミオさんも？」

「私は二佐より2つ上です。エイト君が二佐と同じ年ですね。」

「なら普段ははやてでええよ？二佐なんて堅い言い方は無しや。」

「そうかい？なら遠慮無く呼ばせて貰おうかな。よろしくねはやて隊長。」

軽いノリで手を差し出すケイ。

「……………」

無言で手を差し出すエイト、はやては首を傾げる。

「どないしたん？」

《大方どう呼ぼうか迷っているんですよ。》

代わりに答えたのは右腕にはまっているストロームだった。

《申し遅れました、エイト・ガーラントのデバイスでストロームと申します。》

恭しく挨拶をするストローム。

「礼儀正しい子やね。」

《ありがとうございます、はやてさん。》

にこやかに挨拶を交わす2人。

「インテリジエンスタイプってことはハンドメイドなん？」

《ええ、設計と開発はマスターとミオさんにして貰っています。もちろん、基本のAIは別の人が構築しましたが。》

ミオ達を置いて盛り上がるはやてとストローム。

「もしよかつたら姿を見せてくれへん？」

《…申し訳ありません、マスターから戦闘とメンテナンス以外では起動はダメだと言われていますので。》

「そっか、残念や…」

台詞とは裏腹にあっさりと言うはやてはミオとケイの方へ振り返った。

「2人のデバイスはどんななん？」

「僕のはこれだよ。」

先に見せたのはケイ。

《フェイロンと申します。》

左腕にはまっているフェイロンが挨拶をする。

「ん？見た目は同型やね。」

《ええ、でも妹ほど無骨ではありませんよ？》

悪戯っぽく言うフェイロン。

《姉さん、余計なことは言わないで下さい！それに、私は今の姿も気に入っています！》

またムキになるストローム、そのまま口論が始まりはやはり引きつった笑みを浮かべた。

「ミオさんのはどんな子ですか？」

「この子ですよ。」

ミオが取り出したのはロザリオだった。

「名前はエクレール、非人格型のストレージデバイスです。起動し  
ましようか？。」

リインが返事をする前に展開させるミオ、現れたのは左腕に固定された1mほどの弓だった。

「へえ〜」

「弓型ですね。」

「はい、これが基本形態です。」

感心するはやてとリインを見てミオも満足そうである。

「ただ、この子を起動させている間は左手が使えないので若干不便

「なんですよ。」

「なるほど、確かにそれは難儀やな。」

談笑する3人、そこへ相変わらずにやけ顔のケイと微笑ましい顔のエイトがやって来た。

「いや、ようやく姉妹喧嘩が終わったよって、なんか盛り上がってるね?」

「はい、でも女の子同士の秘密の会話なので深入りは禁物ですよ?」

エクレールを戻しながら笑顔でケイに言うミオ。

「そうは言っても、会話は丸聞こえでしたよ。」

「あらら…盗み聞きだなんて、エイト君は相変わらさずですね。」

若干呆れ気味な表情を浮かべて言うエイト。ミオはケイに向けたものより明るめの笑顔で返した。

「さてと、ほな続きをしようか?」

「あ、ちよつといいかな?」

手を叩いて仕切り直すはやて、そこへケイが手を挙げた。

「なんや?なんか要望でもあるん?」

「うん、この続きは3日ばかり待ってもらえないかと思ってね。」

首を傾げるはやて、ケイはさらに続けた。

「実は4課の方で1つ任務を抱えていてね。まあ、はやて隊長とガルド課長が話している間に会議していた事んだけど、明後日にク

ラナガンからかなり東に行ったところにある廃墟区画で質量兵器の取引が行われるらしいんだ。僕達、それを摘発するように言われていてね、出来ればそれが終わってからゴリアテ対策に本腰を入れたいと思うんだけど、どうかな？」

一気に言い切るケイ、はやては顎に手を当て考える。すると、さらにミオが手を挙げた。

「私もケイ君に賛成ですね。今回のことは正式な手続きを踏んで依頼された任務ですし、蔑ろにするのは気が引けます。」

「なるほどな。ならこの続きはその任務が終わってからにしよう。」  
「ありがとうございます。」

納得をするはやてにミオは胸を撫で下す。するとはやてが何かを思い付いたように手を打った。

「せや！なあ？私等もその任務に参加させてくれへん？」  
「えっ！？」

驚きの声を上げるミオとケイ。

「これから一緒に仕事するんやし、早いとこ各自の能力を把握したいんや。それに、ガルド二佐にも4課の仕事も手伝って欲しいって言われとるし。どうやる？」  
「え〜と…」

期待に満ちた顔で2人に迫るはやて、ミオとケイは顔を見合わせる。とさつきから一言も喋らずに成り行きを見守っていたエイトの方へ向いた。

「自分はどっちでも構いませんよ、上官であるお二方にお任せします。」

「日頃あれだけ口出しするのにこんな時だけ下官面するのは卑怯じゃないか？」

顔を引きつらせるケイ。

「都合が悪くなると上官権限振り回して人に押し付けるケイさんといいい勝負してると思いますが？」

「うっ…」

エイトに睨みつけられたじろぐケイ。それを見たはやてはミオに小声で質問する。

「なあ？エイト君とケイさんって仲悪いん？」

「そんな事はありませんよ？あの2人は兄弟みたいなものですから。」

はやてと同じく小声で返すミオ。

「でも、あれは明らかに怒ってるですよ…」

「それは隊長達の考えすぎですよ。」

心配そうに見ているリインにフツと笑いながら言ったミオがエイト達の方へ向くと結局突っかかっていったケイがヘッドロックを極められていた。

「えっと…つまりエイト君は私達の決定に従うわけですね？」

「はい。個人的には、二佐達に4課のやり方うちを知ってもらうには見てもらうのが一番手っ取り早いですから、来れるなら来てもらいた

いですが？」

ヘッドロックを少し緩めて答えるエイト。

「なんだよ〜結局自分の意見を言うじゃないか〜って…痛い痛い痛い！」

ブーイングをするケイをさらに締め上げるエイト、ケイはたまらずにタップした。

「ん〜私もエイト君の意見に賛成ですね、ゴリアテをどうにかする間の話とはいえ4課の仕事を手伝ってもらうからには早めに慣れてもらいたいですし。」

「僕はもつとつちでもいいや…。」

真面目な顔のミオに対して意気消沈しているケイ。

「では、隊長達は参加で良いですね。」

多数決の結果はやての参加が決定した。

「なんや、若干納得いかんところもあるけど…よろしくお願いするな。」

「よろしくお願いします。」

苦笑いで返すはやてと笑顔のリン、改めて深々と頭を下げた。

「さて、そうと決まったら今日中にはやて二佐のデスクを用意しないといけませんね。」

さつと動き出すエイト。はやては首を傾げた。

「なんで今日中なん？」

「明日は4課はお休みですから、4課は基本的に全員出勤・全員休暇なんです。」

「へえ〜なんや変わつとるな。」

クスクスと笑いながら言うはやて。

「そうだ！こちらは私達でやっておきますので、隊長達はロレンツオ少将に報告してきてはどうですか？」

「いや、さすがにそれは悪いよ……」

人差し指を立てて提案するミオ、しかしはやては頬を掻きながら断る。

「遠慮することは無いですよ？今から本局に行けば帰ってくる頃には終わっていると思うので。」

「…ならお言葉甘えさせてもらっわ。ありがとうな。」

作業をしながら言うエイト。はやてとリインは準備をして本局へ向かった。

「あれ？でも大丈夫かな？」

まだ若干テンションの低いケイが何かに気付く。

「何か問題ありましたっけ？」

ファイルを数冊持ったミオが質問する。

「ほら、ロレンツォ少将って割と話長いし。」  
「ああ……」

微妙な顔をする3人、ケイの心配した通りその日の終業時間になってもはやてとリインは帰ってこなかったのでミオは作戦の概要をメールで送った。

2日後・夕方

・ミッドチルダ・東廃墟区画・

「あそこやな……」

物陰から廃墟ビルを覗むはやて達。

騎士甲冑で完全武装のはやてに対してミオ達は黒いシャツに迷彩柄のカーゴパンツ、ブーツ型の安全靴というレンジャー部隊のような服装をしていた。

「じゃあ最終確認します。」

輪になって話を始めたのはエイトだった。

「その前に質問や、なんでビルに入るところを逮捕せんかったん？」  
手を挙げるはやて。

「取引の現行犯の方が罪が重いからですよ。」

一言で片付けて先に進めるミオ。

《サーチの結果では見張りは入り口に2人、1階に20人強、2階に10人程いてその奥で主犯格の2人が取引しているっぽいですね。かなりの大所帯です。》

待機状態のストロームが報告する。

「それだけいれば踏み込まれても振り返ちに出来ると踏んだんだろ。」

鼻で笑うエイト、さらに続ける。

「あと5分で完全に日が暮れます。逃走経路はガルドさんとB分隊が潰してくれてるから、自分達は予定通り二佐を残して闇に紛れて正面から行きます。」

コクリと頷くミオとケイ、そこへ再度はやての手が拳がる。

「私達はどうすればいいん？」

「はやて隊長の甲冑は目立つから、僕等が合図したら入ってきてくれればいいよ。」

いつもの軽い口調で言うケイ。

「さっきも言ったとおり基本は取引の現行犯で、最悪所持の現行犯で引つ張ります。時計を合わせて下さい。」

時計の時間を合わせる4人。時間になったのを確認して入り口の見

張りを倒して突入した。

「大丈夫ですかね？」

心配そうに入り口を見つめるリイン。

「3人とも場慣れしとるっばいし心配はないやろ。」

リインの頭を撫でるはやて。すると、先行した3人からの合図が出た。

「合図や…いくで！」

ダツと駆け出すはやて。ビルに入った瞬間はやては固まった。

「…なんやこれ」

目の前には明らかに物理的な衝撃を与えられて気絶している人の姿があった。

## 第6話：対策部隊結成（後書き）

いかがでしたでしょうか？

早くも矛盾が生じているような気がしています…

今回で過去の話は終わりです。

そして、次回はメインキャラクターの紹介にしようと思っています。

それでは！

**閑話：雑談会（前書き）**

えータイトル通り雑談会です。

いつもよりグダグダです…

## 閑話：雑談会

ミオ「祝・1万アクセス記念…」

ケイ「第1回…」

ミ・ケ「雑談会！」

（パチパチパチパチ）

ミ「と、言うわけで始めました。第1回雑談会ですよ」

ケ「いや〜まさかこんな更新速度の遅い話に1万ものアクセスがあるなんて、驚きだね。」

ミ「ユニークも現時点で2300を超えてるんですよ！」

ケ「これも日頃から読んで下さっている皆様のおかげだね。作者に代わり厚く御礼申し上げます。」

ケ「さて、始まった訳だけど…具体的に何するの？」

ミ「予定では私達オリジナルキャラクターの紹介らしいです？」

ケ「この作者は何を考えているんだろうね？おそらく何も考えてはいないんだろうけど。」

ミ「そんな事言っていたら冷遇されますよ？」

ケ「その前に更新速度を上げると言ってる！」

ミ「それでは、そろそろキャラ紹介に移ろっと思つのですが、その前に今回の雑談メンバーの紹介です。」

ケ「まずは、我等がゴリアテ対策部隊隊長、八神はやて二佐！」

はやて「ようやく出番や…ていうか2人とも話長いで!？」

ケ「まあまあ、忘れていた訳じゃないんだからいいじゃない。」  
は「よくないわ！『もしかしたら紹介されんのかも』って不安に駆  
られとった時間を返せ！」

ケ「うぐうぐ後ろから飛びついての首締めは止めて……」

ミ「ストップ！ストップです隊長！ケイ君の場合後ろ手にバインド  
をかけて脇腹をくすぐった方が命に関わることなく苦しめられます  
から。」

は「ほう……それはいいこと聞いたわ！！」

ケ「ミオ！？君はどっちの味方なわけ……ってあひゃ〜止めてえ〜」

は「当分は止めんよ？私達を待たせた罰や！！」

ケ「うぎゃ〜」

リン「ていうか……はやてちゃんもリンを見事に放置してるです  
……」

ミ「さて、改めまして……今回の雑談メンバー、八神はやて二佐とリ  
インフォースツヴァイ曹長です。」

は「リ「よろしくお願ひしま〜す！」

ミ「それから……ケイ君は無事ですか？」

ケ「ふふふ……なんとか無事だよ……」

ミ「それは何よりです。では続けますよ。」

は「ちよい待ち、なんか1人足りんことない？」

リ「エイトさんの姿が見当たらないです。」

ケ「エイトはガルド課長に拉致られてるよ、『最近運動不足だから  
模擬戦の相手をしろ』ってはやて隊長が来る前に首根っこ捕まれて  
引きずられて行ったよ。」

ミ「雑談会のために午前中に暇を貰ったのが仇になりましたね、と  
りあえず無事に帰って来るのを祈るばかりです。」

リ「ガルド二佐ってそんなに強いんですか？」

ケ「強いよ。なんてったって前世はブルドーザーだからね、人間な

んで肉迫されたら終わりだよ。」

リ「ブルドーザーなんですか？」

ミ「今はそのブルドーザーに魔法という大砲が付いた戦車ですけどね。」

リ「せ、戦車……」

は「それはさすがに言い過ぎやろ？」

ミ・ケ「……………」

は「なんや……その微妙な顔は？」

ミ「さあ張り切って本題に行きましょう！」

は「強引にはぐらかされた……」

ミ「それでは各自のプロフィールを見ていきましょう！」

は「その前に質問、何人くらい紹介する予定なん？」

ケ「作者が送ってきた資料は3人分だね。」

リ「ミオさんとケイさんとエイトさんですね。」

は「まあそんなところやろうな。」

ミ「はい、それではまずは私からですな、少々恥ずかしいですが……どうぞ！」

ミオネル・センチア

愛称：ミオ

年齢：24歳〔満25歳〕

誕生日：9月6日

身長／体重：165cm／52kg

スリーサイズ：86／49／73

髪型／髪色／眼の色：ショートボブ／緑／赤

趣味：ストライクアーツ

家族構成：父母、兄1人、姉1人

所属：時空管理局本局 情報部第4課

役職：実働小隊A分隊長兼デバイスマイスター

コールサイン：アンバー1

階級：一等空尉

魔法術式：ミッドチルダ式

魔力色：緑

所有クラス：空戦SS+

所有資格：メカニックマイスター／小隊指揮官

稀少能力：重力魔法

その他特徴：制服を着るときは必ず白衣を羽織る

所属歴：本局第四技術部 ミッドチルダ首都航空隊第7部隊 情報部第4課

明るく朗らかで人当たりの良い性格。気持ちの切り替えが早いため、落ち込んでもすぐに復活することが多い。ただ、考えている事が顔に出やすいので、嘘を吐いても見破られることも多い。

また、一度何かに集中すると周りが見えなくなる事がある。

仕事やストライクアーツを通じての交友関係が広い。

戦闘では後方支援と小隊指揮を担当。長距離砲撃や魔力弾による攪乱を主に行う。

デバイス

名前：エクレール

種別：非人格型ストレージデバイス

形状：弓

リカーブボウ

色：白

全長：1.2m

重量：10.7kg

カートリッジシステム：有

中・遠距離での運用を目的として作られたデバイス。  
左手首を挟む形で固定してあるので展開している間は左手が使えない。  
魔力で形成した矢を放つ以外に弓幹から伸びた2本のバレルの間に魔力を溜めて放つ事も出来る。  
AIを搭載していないため魔力の制御は本人が全て行っている。  
待機状態はロザリオで首に掛かっている。

は「しかし、なかなかのハイスペックやな。」

リ「SS+ということはやてちゃんと同じですね。」

ミ「そう言うことになりますね。」

は「でも技術部やったんやろ？何で戦闘ランク試験受けたん？」

ミ「入局の際に『技術部に入りたい』と言ったら『戦闘訓練と昇級試験をきっちり受けるのであれば許す』と父に言われていたので。」

リ「首都航空隊に転属になったのはいつ頃ですか？」

ミ「エクレールを組んですぐなので、63年の秋くらいですね。欠員が出たからという理由で転属になりました。」

は「SS+はその時に？」

ミ「いえ、SS+は4課に来てからです」

は「相当きつかったやろ？」

ミ「そうですね、合格したのはラッキーだったとは思いますよ。」

リ「リカーブボウって何ですか？」

は「確かアーチェリー用の競技弓やったような…」

ミ「その通りです、博識ですね」

は「地球におつた頃にオリンピック特集をたまたまテレビで見てな、そんな時に知ったんよ。」

ミ「ケ「オリンピックク？」」

リ「オリンピッククならリンも知ってるです。4年に1度行われるスポーツの大会ですよ。」

ケ「地球には面白い物があるんだね。」

ミ「ストライクアーツみたいなものはあるんですか？」

は「テコンドーって格闘技があるよ。」

ミ「テコンドーですか…今度チンクちゃんに調べてもらいましょう。」

は「チンクってもしかして…」

ケ「無限書庫司書のチンク・ナカジマだね、仕事で仲良くなったんだ。」

ミ「ゴリアテの資料集めの時も手伝って貰いました。」

は「…あんまり仕事の邪魔になることはせんほうがいいと思うで？」

ミ「うーん…それもそうですね。じゃあ今度無限書庫での仕事の際にエイト君に頼みましょう。」

は「いやいやいや、それもあかんやろ!？」

ケ「さて、実はそんなミオでも、かなり大きな欠点もあるんだよね。」

リ「欠点ですか？」

ミ「あ!!駄目ですよ!!言わないでください…」

ケ「ミオはね、私生活が物凄くズボラなんだよ!」

ミ「ああ…言っちゃった…」

は「そんなにズボラなん？」

ケ「うん、2週間に1度はエイトが家に行って掃除してるくらい散らかってるよ。」

ミ「あゝあゝあゝあゝ」

ケ「しかも、朝は買い置きのパンかシリアル、夜は外食が寮に住んでるエイトの部屋に行って作って貰ってるし。」

は「確かにズボラやな…てか、家事出来んの？」

ケ「唯一出来るのは洗濯だけ。でも、全自動で乾燥までしてくれる洗濯機だから出来るとは言い難いよね？」

リ「ケイさん…ミオさんがいじけてますよ？」

は「ほんまや、縮こまっつてのの字書いとる。」

ミ「はあ……………」

リ「女の子の秘密はバラしたらダメなんですよ？」

は「そうやで？もつとデリカシーを持った方がええ、こつなつたらお仕置きや!!！」

ケ「ええ!？つて後ろ手にバインドはやめ……………あ~~~~!!！」

ミ「さて!気を取り直して続けましょう。」

は「ほんまに切り替え早いなあ。そして何かやり取りに既視感が…」

ミ「気のせいですよ、ね?ケイ君？」

ケ「あゝそうだね……」

リ「ケイさんが脱け殻みたいです……」

ケ「あゝそうだね……」

は「ほんまに脱け殻や。」

ミ「うーん、次はケイ君の番なんだけど…まあ進めてしましましょう!」

は「ケイさん?勝手に進められんで?」

ケ「あゝそうだね……」

リー・ケイラン (李慧蘭)

愛称:ケイ/ケイラン

年齢:24歳(満24歳) (推定)

誕生日:4月7日

身長/体重:180cm/68kg

髪型/髪色/眼の色:うなじで結った肩くらいまでの長髪/黒/黒

趣味：食べ歩き

家族構成：父母、妹1人

所属：時空管理局本局 情報部第4課

役職：実働小隊A分隊員

コールサイン：アンバー2

階級：三等空尉

魔法術式：ミッドチルダ式

魔力色：黒

所有クラス：空戦AAA+

所有資格：小隊指揮官/普通車免許

稀少能力：水・氷への魔力変換資質

その他特徴：目が細い

部隊所属歴：航空武装隊1044部隊 112陸士部隊 情報部第4課

楽天的な性格でいつも軽口を叩いているが、怒るととても冷徹な一面を見せる事もある。

食べ歩きが趣味で新しい店を開拓しては休みの日に4課のメンバーを誘っている。

戦闘時は前線での戦闘を担当。クロスレンジでの素早い攻撃と水・氷系の魔法を駆使した攻撃が得意。

デバイス

名前：フェイロン

種別：女性型インテリジェンスデバイス

形状：剣<sup>カトラス</sup>

色：漆黒

全長：80cm（刃渡り60cm）

重量：5.2kg

カートリッジシステム：有

接近戦を目的とした剣型のデバイス。  
振り回しやすさに重点を置いたため一撃の威力は低いが魔力を纏わせる事により解決している。  
基本的には1本だが状況に応じて2本になる。  
茶目つ気のある性格で妹であるストロームをからかったり主であるケイランと漫才じみたやり取りをする事が多い。  
待機状態は黒い珠がはめ込んである腕輪、左腕に着けている。

は「名前の感じからなんとなく思ってたけど、やっぱり漢字で表記できるんやね。」

ケ「うん…」

ミ「たしか曾お祖父さんが97管理外世界の出身なんですよね？」

ケ「そうだよ…詳しくは知らないけどね…」

は「詳しくは知らなくてどういうこと？」

ケ「僕は貰い子だからね…」

は「…いい加減機嫌直してえな。」

エイト「そうですよケイさん、みっともないです。」

は「うわあああ!？」

エ「どうかしましたか？八神二佐。」

は「どうもこうも、後ろからいきなり現れたら誰だって驚くわ!」

エ「なるほど、確かにそうですね。」

は「やる？以後気をつけてや。」

エ「まあ、善処します。ところで、何でケイさんが落ち込んでいるんですか？」

ミ「話せば長いんですけど…」

（ミ才説明中）

エ「なるほど。原因はケイさんですがやりすぎた八神二佐も悪いですね。」

は「うっ…」

エ「ケイさんも両成敗と言うことで機嫌を直して下さい。」  
ケ「わかったよ。」

は「さて、話を戻すけど、貰い子ってどういうこと？」

ケ「そのままの意味だよ、11歳の時にリー家に貰われた。ケイラソって名前もその時に付けられた名前。」

は「なら本名が別にあるんや。」

ケ「本名と呼べるような名前は無いんだよ、物心ついた頃から研究施設で育ったからね。」

リ「もしかして年齢が推定になってるのも？」

ケ「うん、実年齢は僕にもわからないんだ。ちなみにエイトとフェイロン、ストロームとは最初にいた施設から一緒だよ。」

は「へえ〜付き合い長いんやなあ。」

ケ「ところでエイト、やけに早かったけど何かあったのかい？」

エ「交代要員が来たので帰ってきました。」

ミ「交代要員？」

エ「シグナム一尉ですよ、首都航空隊の。」

は「シグナム？おかしいな、今日シグナムは非番やったような。」

エ「暇だったからアギト空曹と散歩していたらしいです。そしたら戦ってる自分達を見つけたらしくて、それで…」

リ「まさか、それであっさり交代を申し出たですか？」

エ「あ、いえ…交代を申し出たのは…」

リ「シグナムが怪我でもしたらどうするですか！？シグナムも戦車

には勝てないですよ！」

は「待った…リイン、話は最後まで聞かんとあかんよ？」

ケ「そうだよ、まあ大体才ちは見えてるけどね。申し出たのはシグナム一尉の方だろうか？」

リ「え？本当ですか？」

エ「ええ、その通りです。「前々からガルド二佐とは手合わせを願っていたと思っていました。」と言いながら嬉々としてデバイスを構えてましたよ。」

全員「……………」

ミ「…さて続けましょうか！」

エ「そうですね、どこまで行ってますか？」

ミ「次はエイト君の番ですよ。」

エ「なんか良いタイミングで帰ってきたんですね。」

ミ「はい、ではいきましょう！」

エイト・ガーラント

愛称：エイト

年齢：22歳〔満23歳〕（推定）

誕生日：5月18日

身長／体重：185cm／67kg

髪型／髪色／眼の色：短髪／黒／茶

趣味：料理

家族構成：なし

所属：時空管理局 情報部第4課

役職：実働小隊A分隊員

コールサイン：アンバー3

階級：一等空士

魔法術式：ミッドチルダ式

魔力色：白

所有クラス：空戦B

所有資格：普通免許／大型自動二輪免許

稀少能力：なし（現在研究中）

その他特徴：眠たそうな目をしている

所属歴：112陸士部隊 情報部第4課

淡白でテンションは低いが律儀な性格。興味深いものを見たり嫌悪感を感じると途端にテンションが上がる。  
入局当初から自炊をしているため料理が得意。  
戦闘では前衛の他に斥候や索敵も担当している。

デバイス

名前：ストローム

種別：女性型インテリジェンスデバイス

形状：腕部固定型シールド付き突撃槍

色：白銀

全長：2.8m

重量：66kg

カートリッジシステム：無

肘から下の腕部に固定する感じで展開される大型のデバイス。

身体の2/3を隠せるシールドとランス・ワイヤーロープの分離可能な3つのパーツから形成されており、アタッチメントとしてブラスターが存在する。

また、ランスの部分をランチャーにして砲撃魔法を撃つことも可能。真面目な性格で姉であるフェイロンによくからかわれている。

本人の意向でカートリッジシステムは搭載していない。

待機状態は白い珠がはまっている腕輪、右腕に着いている。

は「家族はおらんの？」

エ「はい、ケイさんが言っていた通り自分は研究施設で育ちましたから。」

リ「エイトさん達が居た施設ってどこですか？」

エ「最後に居たのは第5魔法技術研究所ですね。」

リ「うーん…聞いたことある気がするです。」

は「9年前に実験事故を起こした施設や。」

ケ「魔法技術研究と言っつのは名目だけだったけどね。」

エ「やってた事は人体実験でしたからね。」

リ「じ、人体実験？」

エ「過剰なまでの戦闘訓練だったり、薬物投与での筋力増強だったり。」

リ「でも、管理局の施設だったんですよね？」

ケ「だから事故が起きたんだよ。」

リ「???？」

は「やつとつたことを隠蔽するために事故に見せかけて吹っ飛ばしたんや。それが証拠に当時の被験者はほぼ死んどるけど技術者のほとんど生き残つとる。」

ミ「生き残つてる被験者で局員はエイト君とケイ君の2人だけです。」

ケ「僕は事故の時は貰われてたから経験者で局員はエイトだけだね。」

エ「おかげで上層部からの印象は悪いですよ、ランクが低いのはそのためです。」

ケ「Aランク試験を4回も落ちてるからね、何かの陰謀を感じるよ。」

ミ「実力的にはそれなりだと思いますけどね。」

エ「まあ次は合格して見せますよ。」

ケ「次も落ちるに一票！」

ミ「次は受かるに一票！」

は「…シリアスモードが一気に吹っ飛んだな。」  
リ「ですね」

リ「ストロームの形状がいまいちわからないです…」

エ「腕にランスが固定されていて、それを両側から挟むようにシールドがくっついているんですよ。」

は「ワイヤーロープは？」

エ「シールドの裏側にありますよ、バインドの代わりに使ってるんです。」

リ「66kgって重くはないですか？」

エ「元々が100kgを超えてたんでそこまでは重くは感じないですよ。」

は「どうやって軽くしたん？」

エ「シールドを一枚の鉄板じゃなくてチタン製の5層のハニカム構造にしたんです。」

は「ハニカム構造？」

エ「段ボールの構造を思い浮かべてもらえれば一番わかりやすいですよ。」

は「なるほど！それならわかるわ。」

エ「加えて、ランス部分を超合金製にして…」

は「超…なんやて？」

エ「超合金です。掘削用のドリルとか車のトランスミッションなんかに使われる硬い金属ですよ。」

は「ようわからんけどとにかく軽くて丈夫なんや？」

エ「まあそう言うことです。かなり専門的な知識ではありませんが覚えていたら割と便利ですよ。」

は「せやなあ、シユベルトクロイツもやってもらおうかな…」

ミ「ご要望があればやりますよ、隊長のために一肌脱ぎましよう！」  
は「なら前向きに考えとくわ。」

は「料理出来るんやな。」

エ「ええ、昼はいつも弁当です。」

ミ「エイト君の卵焼きは絶品ですよ。」

ケ「たまに入ってる唐揚げが好きだね。でも一番はお菓子だけだね！」

リ「お菓子ですか!？」

は「それは是非とも食べてみたいなあ！」

エ「冷蔵庫にシュークリームがありますよ、今回の為に作って来ました。お茶淹れて持ってきてますね。」

「エイト作業中」

エ「お待たせしました。紅茶は砂糖、レモン、ミルク、好きな味でどうぞ。」

ミ「ケ・は・リ「いただきま〜す！」

エ「……どうですか？」

リ「美味しいです！」

は「ほんまや！甘さもちょうどええし、なによりカスタードと生クリームが細かい！」

ケ「電動泡立て器じゃこっちはいかないんだよね。」

ミ「いつ食べてもお見事ですな〜」

エ「そんなにべた褒めされると恥ずかしいですね。」

は「あ？もしかしてロレンツォ少将の所で出されたケーキって……」

エ「多分自分が作ったやつですね。」

は「なるほどな、でも紅茶はロレンツォ少将の方が上やな。」

ミ「少将はエイト君の師匠ですから。」

リ「…紅茶にジャムってミオさんは何してるんですか？」

ミ「何って地球の飲み方の1つ、ロシアンティーですよ。」

リ「本当ですか、はやてちゃん？」

は「うん、でもよく知ってるなあ。」

ミ「はい、無限書庫で読んだんです。」

は「へえ」

ケ「エイト、お代わり！」

は「速っ！もつと味わった方がええんとちゃっつ？」

ケ「いや、美味しかったからつい……」

エ「八神二佐も遠慮せずにどうぞ。」

は「…ほな、お言葉に甘えてお代わりや！」

リ「リインもです！」

ミ「私もお願いします！」

エ「かしこまりました。」

は「いや、美味しかったなあ」

リ「幸せです……」

エ「…送られてきた資料は以上ですか？」

ミ「はい、というわけで今回の雑談会はお開きですね。」

ケ「うーん……」

ミ「どうしました？」

ケ「今さらなだけでさ、今回の雑談会ってやる意味あったのかな？」

は「ほんまに今さらやな……」

ミ「そうですね……」

エ「まあ、意味があるかどうかは読者の方々に委ねれば良いのではないですか？」

は「体よく丸投げた感があるなあ……」

エ「そうとも言えますけどね。さてと、それじゃそろそろ仕事しましょうか。」

ミ「そうですね。では、締め挨拶をしましょう……」

全「これからよろしくお願いします！」

## 閑話：雑談会（後書き）

以上、いつもよりグダグダな文章でした。

次回から「夜天の主と4課トリオの愉快的な事件簿」はようやく本題に入ります。更新速度は今まで通り遅めになると思いますが、出来る限り頑張りますので、温かい目で読んでいただければ幸いです。

それでは。

第7話：明くる日の朝（前書き）

ようやく更新です。

そして数人キャラが増えます。

## 第7話：明くる日の朝

- 4課オフィス -

オフィスには4課の全メンバーとはやての姿があった。

「さてと、説明してもらおうか？」

床に制服姿で座っているミオ達3人の前で仁王立ちをしているはやてが低い声で聞いた。

なぜ床に座っているかというと、3人ともはやてより身長が高いため、傍から見たら尋問しているように見えなためである。

「ちょっといいですか？八神二佐。」

「なんや…？」

威圧感をタップリと出しながらイトを睨むはやて。しかし当のイトは怖じる気配もなく話を続ける。

「説明って何の説明ですか？」

「…はあ？」

思いがけない質問に素っ頓狂な声を上げるはやて。

「何って、現場での私とミオさんの通信は聞いてなかったんか？」

「通信？ああ、自分が主犯格を大人しくさせている間に何か話しましたね、何だったんですかあれ？」

思い出したようにはやてとミオに尋ねるエイト。

「あの時ですね、隊長から『何故、物理的な外傷を加えて気絶させたのか?』という質問がありまして、今日はその説明です。」

「ああ、なるほど。」

ミオの説明に納得するエイト。

「納得したか? なら、話を進めるで。なんであんな事をした?」

「あの狭い建物内では魔法を使うより殴った方が早かったからです。」

怒気をはらんだはやての言葉にあっさり答えるエイト。

「見張りを倒した時点で取引現場に踏み込んだのはバレていた。いくら退路を別部隊が塞いでくれていたとしても、現場を押さえないと取引での現行犯では引つ張れません。だから魔法を使わずに物理的な外傷を加えて気絶させたんです。」

あくまでも淡々と語るエイト。

「取引での現行犯逮捕ってそんなに重要なん?」

「重要だよ、質量兵器の取引と所持じゃ刑の重さが違うからね。」

呆れた表情で質問するはやて、答えたのはケイだった。

「刑罰が重いということはそれだけ服役する期間が長くなるだろう? そうなれば更生に当てられる時間も長くなるし、出所後に再犯が起きても再犯までの時間を引き伸ばすことが出来る。そうすれば犯罪率が減ってミッドチルダに住む人達の安全性も向上するんだ!」

「あ、えつと…」

立ち上がって力説するケイにたじろぐはやて。

「それに素早く解決したという情報が世間に伝われば犯罪抑制の効果も見込めますし、住んでいる人達の安心感や管理局の信頼性も向上します。たとえそれが微々たるものでも、重なれば大きな成果に変わります。」

補足的に説明するミオ。

「…理屈はわかった。せやけど、それが物理的外傷を負わせる理由にはならんやろ？」

気を持ち直し再度質問するはやて。

「物理的に外傷を負わせるのは恐怖心を与えるためですよ。」  
「恐怖心？」

エイトの返答にキョトンとするはやて。

「普通の人は日常的に魔法を受けている訳では無いので『魔法で撃たれる』という行為より『殴られる』という行為の方が恐いと思う傾向があります。それに、人は血を見ると本能的に恐いと思います。そついった恐怖心が相手に生じれば動きを鈍らせることが出来て鎮圧する速度が上がります。後はミオさんが言ったとおりですよ。」  
「…なるほど。」

エイトの説明に納得するはやて。

「本音を言えばデバイスを起動させるのが面倒だったという理由も  
ありましたけどね。」

「結局本音はそこかい!!!」

エイトの最後の一言につっこむはやて。ため息を吐いて気持ちを落  
ち着かせると言葉を続けた。

「しかし、そんな事まで考えて戦ったんやな、知らなかったわ。」

「全部ガルドさんからの受け売りなんですけどね。」

微笑みながら言うミオ。

「さてと…話は済んだのか？済んだんなら朝礼すんぞ？」

やり取りを傍観していたガルドが確認する。

「あ、はい今行きまーす。」

間延びした返事を返すミオ。デスクの前に立っているガルドの前に  
並んだ。

「うつし…んじゃ4月28日の朝礼、始めんぞ。」

ガルドの声と共に全員が姿勢を正す。

ちなみに並び順はガルドから見て左から、

〔青い髪の子セミロングの女性〕

〔4・5歳くらいの子供を連れた金髪でポニーテールの女性〕

〔赤い髪で背の小さい男〕

〔プラチナブロンドで眼鏡の男〕

「ミオ」

「ケイ」

「エイト」

「はやて」

の順番である。

「まずは、3日前からA分隊がゴリアテの対策部隊に出向になった。つってもオフィスはうちと兼用でうちの仕事もやって貰うつもりだからそのつもりでいてくれ。」

腰に手を当てて話すガルド。

「それから、そこにいる嬢ちゃんゴリアテ対策部隊の部隊長だ、挨拶は後で各自しとけ。」

一番端のはやてを指差して言うとガルドはファイルを開いた。

「んじゃ今日の予定だ。午前はここ数日出来てなかった各部署の予算報告書の作成だ、審議会まであと3日、残ってんのは陸の112、251と教導の7だったな。」

頭を掻きながら作業内容を確認するガルド。

「午後からはA分隊には教導隊7班の手伝いに行つて貰いたい、多分新人の相手だろうからやりすぎるなよ。B分隊は引き続き予算報告書の作成だ。それから、A分隊から1人108へ昨日の報告書を持って行つとけよ。何かある奴はいるか？」

ファイルを閉じながら聞くガルド。するとミオと眼鏡の男とセミロングの女性が同時に手を挙げた。

「んじゃクロード。」

「はい。」

短く返事をして手を下ろす眼鏡の男。

「ゴリアテが現れた時のことを考えると、教導隊へは我々の方が適任ではないでしょうか？」

「まあそうなんだけどよ。高町の嬢ちゃんかな「ちゃんと手加減が出来る人の方が良い」って言ってるな。」

「なるほど…」

渋い顔で納得するクロード。

「アンタのせいよ？ウエル。」

左にいる赤い髪の男を見下しながら言う金髪の女性。

「フェリ、君もだ。」

眼鏡を直しながら溜め息混じりに言うクロードだった。

「あと手を挙げたのはミオとフィーアだったな。とりあえずフィーアから聞くか？」

「えっ？は、はいいい！」

いきなり話を振られて戸惑う青い髪の女性。

「ちなみに、お前さんは今日1日A分隊について貰うぞ。それ以外に質問はあるか？」

「あ、いえ…それがわかれば大丈夫です…」

聞きたいことを先に言われて引き下がるフィーア。

「最後はミオだな…って何かあったか？」

ガルドがミオの方へ向き直ると当人は笑顔で真面目な顔をしてガルドを見据えていた。

「はい、たしか今日の午前中はゴリアテの対策会議をするので4課の仕事は回さないで欲しいと約束していたはずですが？」

「ああ、そうしようと思っただけだな…今日中に提出しないと審議会がうるさくてな…」

頭を掻きながらボヤクガルド。

「相変わらず勝手だね上層部は、自分達がやるのが面倒だからって押し付けてきたくせに。」

鼻で笑うケイ、他の4課メンバーもうんざりな表情を浮かべている。

「まあそう言うわけで今日は諦めてくれないか？その代わりに明日の午前中は一切の仕事を回さねえからよ。」

「…わかりました、約束ですよ？」

若干ふてくされながら了承するミオ。

「ああ…んじゃ各自作業に移ってくれ。」

朝礼を締めるガルド、4課メンバーは各分隊に別れて作業をし始め

た。

A分隊

「で？誰が108に行くんだい？」

会話の口火を斬ったのはケイ。

「こう言っでは失礼ですけど…適任なのはケイさんですよ？」

少し遠慮がちに言うのはフィア。

「適任やったら失礼にはならんと思うんやけど？」

フィアの言葉に首を傾げるはやて。

「隊長の言つとおりです。フィア、言葉はキチンと使わないといけませんよ？」

「うう…ごめんなさい…」

優しく諭すミオ、しかしフィアは萎縮してしまった。

「よしよしフィア、僕が慰めてあげるから元気だそう？」

芝居掛かった口調でフィアの頭を撫でるケイ、ミオは溜め息を吐いて顔を押しえた。

「結局、何が失礼やったん？」

いまいち状況が理解できないはやてがやり取りを傍観しているエイトに尋ねる。

「ケイさんは書類仕事のスピードが物凄く遅いんですよ。」

「なるほど、つまり今回みたいに書類仕事と外回りが重なった場合は外回りの方が適任ってことやね？」

「まあそう言うことです。」

エイトの説明に納得するはやて。

「で、誰が行くんですか？」

悩んでいるミオに聞くエイト。

「うーん…報告書を作るところからやらないといけませんし。まあ今日はフィーアが居ますから、エイト君行って貰っても構いませんか？」

「了解です。じゃあ報告書作る間に八神二佐の紹介を終わらせておいて下さい。」

そう言っつて自分のデスクに着くエイト、そのままキーボードを呼び出して作業を始めた。

「さてと、最初はフィーアですね。」

そう言っつて談笑をしているケイとフィーアの元へ向かうミオ、少ししてフィーアの手を引いて戻ってきた。

「お待ちせしました隊長。まずは、情報4課サポートメンバーのフィーアです。」

「えっと…フィーア・モナーロ三等空士でしゅ……」

緊張のためか、しどろもどろになり嚙んでしまうフィーア。

「焦らんでええよ？ほら、深呼吸して。」

「あ…はい。」

はやてに言われてフィーアは深呼吸で気持ちを落ち着かせる。

「失礼いたしました。フィーア・モナーロ三等空士です。この春に入局しました。コールサインはシトリン2です。」

改めて敬礼をするフィーア。

「ゴリアテ対策部隊の八神はやて二等陸佐です。」

はやては敬礼で返すとがっちりと握手を交わす。

「痛っ!?!」

しかし、その途端にはやては顔を歪める。

「あ…ご、ごめんなさい！ただだ、大丈夫ですか？」

再度慌てふためくフィーア、はやては手をプラプラとさせている。

「大丈夫や、思った以上に握力が強かったから驚いただけやから。」

笑いながら返すはやて、手を見るとフィーアが握った部分が少し赤くなっている。

「ダメですよ？ちゃんと加減しないと。」

「はい…」

ミオの追い討ちにシユンとするフィア。

「でも、フィアってそんなに力強そうには見えへんよね？」

フィアを見ながら疑問に思うはやて、それもそのはずだ。

フィアは背丈もボディラインもミオに近く、明らかにパワータイプではないのである。

「そ…それはですね…むぐっ！」

「その辺りは乙女の秘密ですよ？隊長。」

右手でフィアの口を塞ぎ、左手の人差し指を唇に当てて言うミオ。

「そっか、なら詮索はせんようにするわ。ごめんな？フィア。」

「と、と、とんでもないです！こちらこそ、申し訳ありません。」

はやての謝罪に頭を下げるフィア、やり取りを見ていたミオは肩をすくめていた。

「さて、次はB分隊ですね。」

仕切り直すミオ。

「でも、仕事の邪魔にならんかなあ？」

心配そうに言いながらB分隊の方へ目をやるはやて、視線の先には

机に向かって黙々と作業をしているクロード達の姿があった。

「課長から互いに挨拶しておけと言われてるので大丈夫ですよ。ケイさん、フィーアと一緒に先に作業を始めていて下さい。」

「ん〜了解〜」

間延びした声で答えるケイ、言われた通りフィーアと一緒に作業を始めた。

## 第7話：明くる日の朝（後書き）

と言うわけで新キャラのフィーアでした。

次回は残ったB分隊をメインで行こうと思つてます。  
まあいつ更新できるかはわからないのですが…

それでは。

## 第8話・それぞれの個性（前書き）

更新です！

そして今回は最後の方に敵サイドが少しだけ登場します。

## 第8話：それぞれの個性

- 4課・オフィス -

B分隊

「あーあーあー面倒くせえなあ！何で俺達が他の部隊の決算報告書を書かなきゃいけないんだよ？」

先程の朝礼の時にクロードの横に居た赤髪の男が椅子の背もたれに体を預けながら言う。

「仕事なんだから仕方ないでしょ？てか、あんたもさっさと取りかかりなさいよ！」

「痛っ！わかつたよ、やればいいんだろ…！」

隣でキーボードを叩いているポニーテールの女性に脛を蹴られて作業を開始する赤髪の男。

「だが、確かにウエルの言い分もわからなくはないな。」

「マジ！？それマジで言ってる？クロード。」

クロードの言葉に目をキラキラさせて食いつくウエル。

「ああ、112陸士部隊と教導隊7班は初期の内に資料を提出していたからここまで作業が押しているのは我々の落ち度だが、251陸士部隊に関しては資料の提出が遅すぎる。加えてほとんど纏めていなまま提出されているから整理するのも一苦労だ。」

溜め息混じりにキーボードを叩くクロード。

「大丈夫なの？」

横目で見ながら尋ねるポニーテールの女性。

「ああ、教導隊7班はA分隊が午前中に片付けると言っていたのでフェリとウエルの2人で112を片付けてくれ。その間に僕は251の資料を整理しておく。」

そう言っただけで着々と作業を進めるクロード。しかし、次の瞬間フェリの方向から丸められた紙が投げつけられた。

「フェリ？」

「2人じゃないわ、3人よ。」

少しご立腹な様子のフェリ、その横では4、5歳くらいの子供が頬を膨らませていた。

「…そうだったな、すまない。では、フェリとウエル、そしてカオスの3人で頑張ってくれ。」

優しい口調で言い直すクロード、頬を膨らませていたカオスは笑顔になってキーボードを叩き始めた。するとそこへはやてを連れたミオが現れた。

「作業中に失礼します。」

緊張感のない声で言うミオ。

「ミオさん？ああそういえば挨拶がまだでしたね。」

作業を止めて立ち上がるクロード達、はやての前に整列した。

「情報部4課、実働小隊B分隊長、クロード・サーブラウ三等空尉  
であります。ポジションは後衛と戦闘指揮。コールサインはベリル  
1です。」

落ち着いた声で初めに自己紹介をしたのはクロード。

背丈はエイトと同じくらいで痩せ型。耳が隠れるくらいのプラチナ  
ブロンドの髪と切れ長の眼、そしてその眼の印象を和らげるように  
掛けている眼鏡が特徴的である。

「よろしく。」

「はい、よろしくお願いします。」

にこやかに握手を交わすはやてとクロード。

「次は私達ね、フェリシア・アルシオーネよ。階級は空軍曹、ポジ  
ションは前衛、コールサインはベリル2。よろしくね?」

敬礼もせず不敵な態度で手を差し出すフェリ。

「フェリ?目の前にいる人は貴女より年下だけど階級はうんと上な  
のよ?」

「わかってるわよ。でも正式な場所って訳じゃないんだから別にい  
いでしょ?」

呆れるミオに対して胸を張って言うフェリ。はやては気にせず握

手に応える。

「なんやアイリス二佐にそっくりやな？」

握手をしながら言うはやて。

はやての言うとおりフェリは外見的特徴も性格も112陸士部隊のアイリス・テーマにそっくりである。

「まあアイリス二佐は私の従姉だからね。」

笑いながら言うフェリ、さらに続ける。

「姉さんは私の母親の兄の娘。加えて私も姉さんも祖母似なの、だから外見は必然的に似るわけ。と言っても私はバトルマニアって訳じゃないけどね。」

「そうなんや…」

腰に手を当ててニツと笑うフェリに対して苦笑いを浮かべるはやて。

「でさ、話によると二佐もユニゾンデバイスを連れてるって聞いたんだけど？」

キョロキョロと辺りを見回すフェリ。

「あゝリインは数日間はおらんのよ。」

頬を掻くはやて、説明を続ける。

「ヴィータがな、「ここ何日か新人の教導や任務で忙しくて書類仕事を後回しにしてたら溜まっちゃった！はやて、助けて！」って言

「うもんやから…」

「それでリインちゃんに白羽の矢が立ったと。なんかどこも似たり寄ったりね」

苦笑しながら言うフェリ。

「さっき私もって言っとったけど、もしかしてその子はフェリシアさんのユニゾンデバイスですか？」

フェリの傍らに立つカオスを見ながら言うはやて。

「ええ、名前はカオス。こんな名前だけど立派な女の子よ。」

「そうなんや、よろしくな？カオス。」

カオスと同じ目線になるようにしゃがんで言うはやて、対してカオスは無言で頷いた。

「ああそれから、私のことはフェリでいいわよ？みんなもそう呼んでるし。」

立ち上がるはやてに言うフェリ。

「了解や、よろしくな？フェリさん。」

「はい、よろしく。」

再度握手を交わすはやてとフェリだった。

「さて、最後はウエル君ですね。」

次のメンバーの紹介に移るミオ。

「ウエルター・シルベラート空曹です！ポジションは前衛！コールサインはベリル3！ウエルって呼んで下さい！よろしくお願いします！」

一際元気に挨拶をするウエル。

「いや、まさかあの八神はやて二佐に会えるなんて光栄です！後で色々お話を聞かせて貰ってもいいですか？」

「あ、えつと…」

興奮気味なウエルに対して若干引き気味のはやて。

「あなたは少し落ち着きなさい！」

「痛っ！！なにすんだよ！？」

ウエルの頭を叩くフェリ、スパーンと軽い音が響く。

「まったく、そんなんだから背が伸びないのよ。」

「背は関係ないだろ！」

馬鹿にするフェリに食いかかるウエル。

フェリが言うとおり、ウエルの身長ははやてより若干低い。

「いい加減やめないか2人とも！八神二佐が困っているだろう！」

怒鳴るクロード、フェリとウエルは喧嘩をやめた。

「見苦しいところをお見せして申し訳ありません。」

深々と頭を下げるクロード。

「気にしてへんよ。それにしても、クロード君ってお兄ちゃんって感じやなあ。」

「そうなんですよ、歳のわりには面倒見が良くってい助かってます。」  
笑いながら言うはやとミオ、クロードは複雑な顔をしている。

「よかったわね〜クロードお兄ちゃん？」

ニヤニヤと笑いながらクロードを小馬鹿にするフェリ、クロードは短く溜め息を吐いた。

「フェリ、それ以上からかうなら今日の残りの作業は全部君にやってもらうよ？」

「えっ!?!」

威圧感を放ち眼鏡を上げながら睨みつけるクロード、フェリは顔をひきつらせる。

「当然終わるまでは帰さない。さて、何時間かかるかなあ？」

「ごめん…謝るからそれだけは勘弁して…」

仕返しと言わんばかり黒い笑みを浮かべて言うクロード、フェリは半泣き状態で謝った。

「まったく…ではミオさん、我々は作業に戻ります。」

「お手間を取らせました。大変そうですけど頑張って下さいね？」

ミオがそう言うくとクロード達はデスクに戻って作業を再開した。

「さて、私達も戻りましょうか隊長？」

「せやね。」

自分達のデスクに戻るはやてとミオ。そこにはディスプレイの前で悪戦苦闘しているケイと軽快にキーボードを叩くフィーア、そして書類をプリントしているエイトの姿があった。

「お疲れ様です八神二佐、ミオさん。」

2人に気付くエイト。

「お疲れ様です。報告書は出来ましたか？」

「ええ、後は纏めて持って行けば終わりです。」

トントンと書類を揃えてクリップで留めるエイト、それを見てはやては首を傾げた。

「わざわざプリントアウトせんでもデータで渡したらええんやない？」

「一応データも渡しますよ？ただ、データは消えたときが怖いので念のために紙にもおこしているんです。」

人差し指を立てて説明するミオ。

「さてと、じゃあ行ってきますね。」

「ちよつと待って下さいエイト君。」

報告書が入った封筒を持って出発しようとするエイトを引き止める

ミオ、はやての方へ向いて続ける。

「隊長、エイト君と一緒に108へ行つて下さい。」

「えっ？私も？」

キョトンとするはやて。

「はい、ゴリアテ対策部隊が出来たことの報告と協力要請をして欲しいんです。」

「ああ、なるほど。」

真面目な顔をして言うミオ、はやても腑に落ちたように納得する。

「と言うわけで、もう少し待ってもらっても良いですか？」

「ええ、構いませんよ。」

エイトの方へ振り返るミオ、エイトはあっさりと了承する。

「あゝとりあえず表に車を回してきますね。」

「はい、気をつけて下さいね？」

エイトを見送るミオ、はやては急いで準備を始めた。

・地上本部・正面玄関・

「お待たせや！」

息を切らせながら言うはやて。

「そんなに急がなくても大丈夫ですよ？」

エイトはあっさり言うのと車に乗り込んだ。

「ちよっ！待ってえな？」

急いで助手席に乗り込むはやて。

2人が乗り込んだのはスポーツセダンタイプの車だった。

「これってエイト君の車なん？」

シートベルトを締めながら尋ねるはやて。

「ええ、ガルドさんが新車を買ったときに安く譲ってもらったんです。もつとも、自分は寮暮らしなので地上本部の駐車場に置きっぱなしにしていますけど。」

ルームミラーを調節しながら答えるエイト。

「その割には綺麗やね？」

キョロキョロと見回しながら言うはやて。

「定期的にメンテナンスはしてますから、じゃあ出発しますよ。」

サイドブレーキを下げてゆっくりとアクセルを踏み出すエイト、程なく地上本部の敷地から一般道に出た。

「せや、ミオさんから伝言でな、「そのまま直に教導隊第2演習場に向かってくれ」やて。」

思い出したように言うはやて。

「了解です。ところで八神二佐は新人研修に参加させるのですか？」  
「それはなのはちゃん次第やな、なのはちゃんが参加を許可してくれるなら参加するけど。」

「なるほど、まあどっちでも良いんですけどね。」

またあっさりと会話を終わらせるエイト。

「…なあエイト君？」

「なんですか？」

「昨日も言ったけど、八神二佐っていうのは止めて貰えん？」

少し眉間にシワを寄せて言うはやて。

「なら何とお呼びすれば？」

「好きなように呼んで貰ってええよ、あれなら呼び捨てでもええし。」

「はあ。」

そう言われて少し間を置くエイト。

「では、八神二佐で。」

「変わってないやん!？」

真面目に答えるエイトに盛大につっこむはやて。

「別に意地悪やイヤミで敬語を使っているわけではないんですよ?。」

「えっ?。」

キョトンとするはやて、エイトはさらに続ける。

「八神二佐の実力と実績、そして人柄。その全てに敬意を表しているからこそその敬語です。仮に自分にとって八神二佐が敬意を表すに至らない人物であれば、こうして話すことすらしないですよ？まあ、何か聞かれたら答えるくらいはしますけど。」

相変わらず淡白な口調で話すエイト。

「そんな感情のこもってない声色で言われてもなあ…」

納得がいかない顔をするはやて。

「まあ、これが自分の性格であり個性ですから。それに、他の2人がわりとハイテンションですからね、自分はこれ位でちょうど良いと思うんですよ。」

少し笑いながら言うエイト、その後は他愛のない話をしながら2人は108陸士部隊の隊舎へ向かった。

- ????.?・研究室内 -

わりと明るい研究室内には様々な形の生体ポッドが置かれており、機械の光が規則正しく明滅している。

その中の1つ、シリンドラー型のポッドの中にはゴリアテが入っており、その前ではキーボードを叩いている男の姿が、その近くには腰に手をあてて立っている女性とベッド型のポッドの前で中を大人し

く覗いている少女の姿があった。

「よし、完成じゃ。」

額に浮かぶ汗を拭きながら呟く男。

30歳くらいでスキンヘッドの男はチノパンにTシャツの上に白衣を着ている。

「ちょっと、今回は大丈夫なんでしょうね？前回みたいに「調整に失敗しました」なんて事になったら本気で殴るわよ？」

怪訝な顔で尋ねる女性。

歳は20代前半くらい、黒髪のショートヘアーに白いヘッドギアを着け黒を基調にしたボディースーツを着ている。

「大丈夫じゃ、僕は同じ失敗はせん！今回は間違いなく強力なリンカーコアを持つとる魔導師の所へ転移するわい。」

男が鼻を鳴らして言う。

「頼むわよ？それでなくても前回、強力なリンカーコアを2つも逃したんだから…」

額のヘッドギアに手をあてて溜め息を吐く女性。さらに言葉を続ける。

「で？今回も私が付き添えばいいの？」

「いや、今回はお嬢に行ってもらおう。良いかな、お嬢？」

ベッド型のポッドを覗いている少女に話し掛ける男、少女は男の方

へ向いた。

歳は10歳くらい、長い金髪をうなじの辺りで黒いリボンで纏め、大きな三つ編みにしている少女は女性と同じボディスーツの上に白い外套の様なものを羽織っている。

「構わないわ、ゴリアテがピンチになったら加勢すればいいのでしょうつ？」

あまり抑揚の無い声で答える少女。

「その通りじゃ、任せたぞ？お嬢。」

キーボードを叩いてゴリアテが入ったポッドを開く男。少女は無言で室内から出て行き、その後をゴリアテがゆっくりと歩きながら追っついていった。

.....

GPS「GPSと」

ミオ「ミーオネルの」

G・ミ「コメント返信のコーナー！」

G「と、言うわけできいきなり始めましたこのコーナー。進行は私

GPSと...」

ミ「ミーオネル・センチアでお送りします。」

G「なんと、この駄文に初めての感想が来ました！」

ミ「そんなわけで、何か既視感ありありなこのコーナーを使って返

信をして行くつもりです。」

kirishimaさん

G「感想ありがとうございます!」

M「ありがとうございます。」

G「確かに4課のメンバーは癖のある奴らばかりです。」

M「まあなんとなく個性が被っているキャラも居ますけど。」

G「うっ…当たっているだけに反論できない。」

M「更新が遅く、文章力の低い作品ですが、これからも頑張りますので暖かく見守って下さい。」

M「ところで、これって見事にウィズ君の小部屋のパクリですよね…許可とか取りました?」

G「いや無許可でやってる。だからクレームが来たら止めるつもりです。」

M「なるほど、存続するかどうかは読者の皆様にかかっているわけですね?」

G「そういうことです。これからも皆様からのご感想、ご批判、ご指摘をお待ちしています。」

第8話・それぞれの個性（後書き）

如何でしたでしょうか？

正直、文章の構成が滅茶苦茶な気がしてなりません…

そして気付いたことが1つ…

割と生臭いバトルを考えているくせに年齢制限してませんでした…

申し訳ございません…

**第9話：報告会議（前書き）**

復活しました。

長い間放置してしまって申し訳ありません。

## 第9話：報告会議

- 108 陸士部隊舎 -

はやてとエイトは隊舎の駐車場に車を止め正面玄関に向かっていった。

「ここに来るんも久々や、ナカジマ三佐元気にしてるかなあ？」

ウキウキしながら歩くはやて。

「ここの人達は基本的に元気ですから問題無いと思いますよ？」

はやての後ろで歩調をあわせながら言うエイト、手には報告書を持っている。

「エイト君はよく来るん？」

振り返って尋ねるはやて。

「ええ、最後に来たのは2週間程前ですが、平均して週に2回は来ますよ。」

「週2ってなかなか多いな？」

足を止めて驚くはやて、エイトも足を止める。

「もしかして、付き合ってる人が？」

ニヤニヤしながら言うはやて、その顔を見てエイトは溜め息を吐く。

「ストライクアーツの弟子が居るんですよ。」

「…なんや、オモロくないなあ。」

口を尖らせて言うはやて、再度歩き始めた。

・ロビー・

「さてと、まずは…」

「見つけたッスー!!」

受付に向かおうとするエイトに大声を上げたのは108陸士部隊長  
ゲンヤ・ナカジマの末の娘、ウエンディ・ナカジマだった。

「ギン姉から来るって聞いてたから待ってたッスよ。」

駆け寄ってエイトの前で胸を張るウエンディ。

「久しぶりだなウエンディ、元気にしてたか?」

「当然、ちゃんと毎日トレーニングもしてるッスよ。」

頭を撫でながら言うエイト、ウエンディは満面の笑みを浮かべてい  
る。

「久しぶりやね?ウエンディ。」

「お久しぶりッスはやてさん。」

握手をしながら挨拶をするはやてとウエンディ。

「最後に会ったんは施設出るときやから…1年ぶりか、みんな元気

にしとるん？」

「みーんな元氣ッスよ！チンク姉は無限書庫でディエチはなのはさんの所、ノーヴェと私はギン姉と一緒にここで頑張ってるッス！」

グツとカゴぶを作るウエンディ、はやては「そうかそうか」と言いながら頷いている。

「さて行こうか、会議室でいい？」

話を仕事方面に切り替えるエイト。

「そうッスね、ギン姉もノーヴェもパパリンも待ちかねてるッスよ。」

「…なぜナカジマ三佐が？」

エイトの方へ向き直るウエンディ、エイトは眉をひそめる。

「さあ？あ、でも…」

「でも？」

ウエンディの言葉を反芻するエイト。

「パパリン、はやてさんが来ること知ってたみたいッスよ？」

「えっ!？」

- 会議室 -

会議室の中ではギンガとノーヴェ、そしてゲンヤの3人が着席している。

「エイト達を連れてきたツス。」  
「失礼します。」

ウエンディに続いて敬礼をしながらはやてとエイトが入る。

「おう待ちくたびれたぜ、まあ座れ。」

頼杖をつきながら着席を促すゲンヤ。はやてはゲンヤの対面に、ウエンディはノーヴェの横に座る。

エイトはウエンディと入れ替わるように立ったギンガと報告会の準備をしている。

「お久しぶりですナカジマ三佐、お元気そうです。」

「おう、お前さんの活躍は聞いてるよ、頑張ってるそうじゃねえか。」

「あ…いえ、まだまだですよ。」

ゲンヤの賞賛に照れるはやて、とても嬉しそうである。

「準備が出来ました。」

ギンガの一言で会議室の空気が一変する。

「始めてくれ。」

ゲンヤの合図で報告会が始まり、まずは情報4課の報告書が各自の前の小さなモニターに映しだされた。

「それでは昨日起きた事件の報告を始めます。」

淡々と話し始めるエイト、まずは事件現場や解決までの経緯、負傷

者の数などが報告される。

「次に押収した物品についてです。今回押収したのはハンドガンタイプが8丁、ライフルタイプが2丁、弾丸が約2000発となっております。」

モニターに押収物の写真が映し出される。

「ほぼ間違いなく97管理外世界製の物だと思われます。」  
「地球製か……」

そう呟いたのははやて、ゲンヤが言葉を続ける。

「根拠は？」

「1番は性能と構造です。試射の結果800m先の的に命中させられるライフルは97管理外世界製以外ではなかなか無いですから。」

モニターが写真からエイトがライフルを撃つ動画に切り替わる、ライトの明かりで照らされているのを見ると場所は屋外の演習場のようだ。

「いつの間にこんな事したんや？」

驚きながら尋ねるはやて。

「八神二佐が帰られた後ですね、この後4課のデバイスルームで分解してみました。」

今度は分解された銃の写真と火薬の成分表が映し出される。

「製造番号は消されていました。使われている金属や火薬の成分は以前押収された物と一致します。この事を踏まえて今回の物品は97管理外世界製の物と判断しました。情報4課からは以上です。」  
報告を終わらせるエイト、各自のモニターが閉じられる。

「一晩でよくここまで纏めたな？」

椅子の背もたれにもたれながら感心するゲンヤ。

「ええ、おかげさまで自分とミオさんは寝不足です。」

「エイトの顔じゃ説得力がねえって。」

すかさずツツコミを入れたのはノーヴェ、会議室に笑いが起こる。

「確かにね…さて、ここまでで何か質問はありますか？」

場を仕切り直すエイト、はやての手が上がる。

「試射をした押収物は今どこにあるん。」

「現在は4課の押収物保管庫にあります。後日、然るべき手順を踏んで本局に送ります。」

「本局？地上本部の管理部やのうて？」

エイトの言葉に首を傾げるはやて。

「地上本部に間借りをしています。情報4課は本局の部署ですから。」

はやての疑問にしっかりと答えるエイト、はやてはさらに首を傾げ

る。

「でも、制服は陸の制服やん？」

「陸の高官の中には本局を敵視している方も多いですから。ただ、そういう方に限って人の名前や顔、所属部署を覚えておられないので地上で活動するのに支障は出ないですが。」

「なるほどな。」

苦笑いを浮かべながら納得するはやて、他に質問が無いようなので次はギンガの報告が始まる。

「えー、逮捕した犯人グループの内、事情聴取が出来たのが8人、残りの20数名は未だに意識が戻ってなくて聴取が出来ていません…」

溜め息混じりにエイトを見るギンガ、当のエイトはしれっとしている。

「この辺りは情報4課に依頼した時点で覚悟していたのでよしとして…聴取をした8人、特に主犯格の2人は完全に黙秘しているため、兵器の入手経路も使用目的もわからない状況です。」

申し訳なさそうに報告を終えるギンガ。

「まあ昨日の今日やし、仕方ないよ。」

フォローするはやて、他の3人も頷いている。

「しかし、このままだとかかなり厄介ですね。」

再度話を切り出したのはエイト。

「そうですね…」

「ああ…」

「早いとこ対策を打たなマズいな…」

神妙な面持ちになるギンガ、ゲンヤ、はやての3人。対してノーヴエとウエンディは顔を見合わせている。

「…あれは理解してないな。」

呆れながら呟くエイトだった。

「さてと…んじゃそろそろ本題に入るか。」

エイトとギンガが席に座るのを確認して話を切り出すゲンヤ、さらに続ける。

「昨日の報告だけならガーラント1人で事は足りる。それに、『捜査官の八神が情報4課にいる』これだけでも何かデカイ事件が起きた、もしくは起きる可能性が有るって言ってるようなもんだ。」

腕を組んで不敵に笑うゲンヤ。

「ここは単刀直入の方が良さそうですね。」

「せやな、でもその前に…どうして私が情報4課にいるって知ってたんですか？」

顔を見合わせる2人、はやては先程から気になっている事を尋ねた。

「とある情報筋からちょっとな、ついでに言えばお前さんがどんな事件を担当してるかもちつとは知ってる。」

そう言いながらエイトの方をちら見するゲンヤ、エイトは少し考えてはやてに尋ねる。

「八神二佐、ロレンツォ少将から辞令を言い渡された後誰かに話しませんでした？」

「112陸士部隊のアイリス二佐とウイズに話した…あつ！」

「やっぱり…」と呟くエイト、どうやらはやても話が繋がったようだ。

「さてと、じゃあ話をしようか。確かゴリアテだったな、そいつが現れたらどうすればいい？」

話を進めるゲンヤ、はやてとエイトは真剣な表情に戻す。

「まずゴリアテ単体で現れた際は八神二佐、もしくは4課のA小隊に連絡を入れて下さい。それと平行して周りの民間人及び非戦闘員の避難をお願いします。」

「つまり、手は出すなつて事か…」

エイトの説明に納得がいかない様子のゲンヤ。

「ええ、断定は出来ませんが交戦記録を見たところゴリアテは単体では反撃しからないみたいなんです。」

あっさりと言いきるエイト、その言葉に食いついたのははやてだっ

た。

「待った、交戦記録って映像で残ってるのはついこの前の1度きりやる？なんでそこまで解るん？」

立ち上がってズイツと詰め寄るはやて、普通に考えたら当然の疑問である。

「初めになんとなく気付いたのはケイさんです。その後、最近まで比較的暇だった自分が映像と様々な資料を照らし合わせて一応そういう結論に達しました。」

焦る様子も見せずに答えるエイト、はやて以外は呆れている。

「相変わらずですねエイトさん……」

「まったくだよ、もう一度入院したほうがいいんじゃないの？」

「まあエイトらしいツスけど。」

立て続けに言うギンガ達、エイトは「当分はいい。」と一蹴する。

「まあ単体で来た時は了解だ。だかよ、組織ぐるみだったらどうするよ？」

話を戻すゲンヤ、はやても席に座り直す。

「出来る限りは4課で処理しますが、規模によっては共闘を要請させていただきます。」

「そうかい。だかよ、こつちも割ける戦力は少ないぞ？」

「ええ、そこは重々承知しています。それに、最悪の場合は情報部の権限を行使しますので。」

一息吐くエイト、ゲンヤは眉をしかめているはやての方を見る。

「お前さんもそれで良いのか？」

「え？あ、はい…そんな感じでしょうか…」

曖昧な返事をするはやて、話が先々進むため若干追いつけないようだ。

「んじゃこの話は以上だな。」

「ええ、今後ともよろしくお願いします。」

スツと席を立つて頭を下げるはやてとエイト、会議はそのまま終わった。

.....

GPS「GPSと」

ミオ「ミーオネルの」

G・ミ「コメント返信のコーナー！」

G「その前に、一年間放置してしまって申し訳ありませんでした、心よりお詫び申し上げます。」

ミ「…とりあえず理由を聞いてみてもいいですか？」

G「なかなか納得のいく感じにならなくて…書いては消してを繰り返してました。」

ミ「行き当たりばったりで書いてるからですよ。」

G「はい…反省しています…」  
ミ「え、それでは返信コーナーです。」

k i r i s h i m a さん

G「ありがとうございます。凄く元気づけられます！」  
ミ「本当に嬉しい限りです。」

G「B分隊は兄弟みたいな感じです。」ミ「クロード君が面倒見の良い長子、フェリがマイペースな中子、ウエル君はお調子者の末っ子って感じですね。」

G「まあ大体そんな感じです。」

G「さて、ここで少しだけ目標を立ててみたいと思います。」  
ミ「なんでしょうか？」

G「一月に一度は更新する。とりあえずこれを目標に頑張ってみようと思います。」

ミ「…無理なんじゃないですか？」

G「それでも頑張ります。ただ、相変わらず表現力の乏しい矛盾だらけの文章しか書けないのでそこは大目に見て下さい。」

ミ「だそうです。」

G「それでは、これからも御意見、御指摘、御感想お待ちしています。」

**第9話：報告会議（後書き）**

いかがでしたでしょうか？

今後は出来るだけ一月に一度の更新を頑張ります。

それでは。

**第10話：はやての疑問（前書き）**

ちょっとだけどうでもいい話が続きます。

ご了承ください。

## 第10話：はやての疑問

- 108 陸士部隊舎・廊下 -

会議室を後にしたはやて達五人は廊下の一角にある休憩スペースで飲み物を片手にくつろいでいた。

「なんかあつさりと終わったよなあ。」

話を切り出したのはノーヴェだった。

「そうツスね、まあおかげでこうやって話せる時間が出来たからあたしは嬉しいツスけど。」

ノーヴェの横でニコニコと笑いながら言うウエンディ、逆側ではエイトが缶コーヒーを飲んでいる。

ちなみに、休憩スペースに備えられているベンチにははやてが真ん中に座っており、両隣にギンガとノーヴェが座っている。

そして、エイトとウエンディは何故か立ち話である。

「雑談もええんやけど、仕事は大丈夫なんか？」

ギンガの方を向いてはやてが尋ねる。

「ええ、昨晚から緊急出動要員だったので明後日の朝まではフリーです。」

にこやかに答えるギンガ、夜通し起きていた割には元気である。

「なるほどな、エイト君の方はどうなん？」

「昼からの教導に参加という事なので二時間くらいは大丈夫です。」

時間を確認するエイト、その言葉を聞いてウエンディの目が光る。

「だったら久々に勝負して欲しいッス！」

真剣な目で言うウエンディ、エイトはコーヒーを飲みながら考える。

「まあ時間はあるし……」

「やった！！んじゃ早速訓練場にGOッス！」

エイトの腕をグイツと引つ張るウエンディ、エイトも嫌な顔をせずについて行く。

「勝負ってなんや？」

いきなりの出来事に呆然となりながら尋ねるはやて。

「ストライクアーツですよ。ウエンディはエイトさんの教え子ですから。」

「ああ、弟子ってウエンディやったんや。」

「ええ、週に二回、仕事が終わった後にスパリングと試合を行ってるんです。」

笑いながら説明するギンガ、はやても納得する。

「さてと、あたしは見に行くけど、ギン姉とはやてさんはどうすんの？」

スツと立ち上がるノーヴェ。

「もちろん行くわよ。」

「私も、エイト君がどういいう戦い方するか気になるし。」

立ち上がりながら言うギンガとはやて、三人は持っている飲み物を飲み干すと空き缶をゴミ箱に捨てて休憩スペースを後にした。

- 訓練場 -

108隊の訓練場は魔導師達による紅白戦の真っ最中だった。

「ん〜完全に紅が不利ツスね〜」

模擬戦の様子を見ながらウエンディが呟く。

「目の前だけに集中してたら遠距離からの狙撃がつて、直撃してるし…」

紅組の中衛が倒される様子を見ながら言うウエンディ。

紅白戦の戦闘形式は廃墟による7対7の殲滅戦。

戦況は紅組の前衛・中衛が全滅、残るは小隊長と後衛魔導師が二人。対して白組は前衛が一人戦闘不能になっているだけである。

「やっぱり指揮官の違いって大きいツスね〜」

「何を一人でブツブツ言ってるんだよ…」

後ろからツツコミを入れたのははやて達と一緒に来たノーヴェだった。

「おっ！来たッスね？」

「まあ当然だよ…って、エイトはどこ行った？」

キヨロキヨロと周りを見回すノーヴェ、確かにウエンディと一緒にいたエイトの姿がどこにもない。

「エイトなら訓練場の使用申請に行ってるッス。」

「ああ、なるほど。」

「いやいやいや、そこ納得する所やないやろ？」

ウエンディの言葉に納得するノーヴェ、すかさずはやてのツッコミが入る。

「使うんは108隊の訓練場やろ？なんでエイト君が…」

「好きでやっているので気にしないで下さい。」

「うわぁー！」

いきなりはやての背後から現れるエイト、思わず距離を取る。

「どうかしましたか？」

しれっとした顔で言うエイト。

「どうしたもこうしたも…いきなり現れたら驚くやろ！」

「ああ、それは申し訳ありませんでした。」

焦るはやてに対してあっさりと謝ったエイトはウエンディの方へ向かう。

「許可は出たッスか？」

「うん、カルタス三尉にも話は通ってるから模擬戦が終わったらそのまま試合開始。」

「おお！腕が鳴るッス！」

シャドーボクシングをしながら張り切るウエンディ、エイトははやて達の方へ振り返る。

「後は…ギンガかノーヴェ、どっちか審判頼んでも良いかな？」  
「ならあたしがやるよ。」

快諾したのはノーヴェ。

「よろしく、それじゃ軽くアップしようか。」  
「そうッスね、んじゃ…」

互いに待機状態のデバイスを取り出す。

「ストローム。」  
「ライディ！」  
「トレーニングモード・セットアップ！」

掛け声と共に光に包まれるエイトとウエンディ。

エイトは質量兵器の取引現場に踏み込んだ時と同じ黒い長袖のシャツに迷彩柄のカーゴパンツの姿。

ウエンディは紺を基調にしたシンプルな半袖シャツと七分丈のパンツ姿である。

「ルールはどうするッスか？」

「「スタンダードルール」で。」

「了解、んじゃアップ開始ッスね。」

ウェンディの合図で訓練場に向かう二人、模擬戦の邪魔にならないように隅の方で準備運動を始めた。

「…なあギンガ、いくつか聞きたいんやけど、ええかな？」

「ど、どうぞ…」

若干黒いオーラを纏ったはやてにたじろぎながら答えるギンガ。

「会議の時から思ってたんやけど、なんでエイト君は上官のギンガに対してタメ口なんや？」

口を尖らせるはやて、ギンガはたじろいでいる。

「えつとですね、エイトさんは元々陸士隊の所属で、私自身はそれこそ入隊の頃から交流があったんです。」

「あれ？せやけど私108隊でエイト君に会ったこと無いで？」

首を傾げるはやて。

「エイトさんは108隊じゃなくて112隊の所属だったんです。」

「112隊とはアイリス二佐が部隊長に就任して以降から頻繁に模擬戦や共同任務を行ってるんです。」

いつものペースを取り戻しながら答えるギンガ。

「なるほどな、古い付き合いやからこそか…」

諦めたように溜め息を吐くはやて、そこへギンガから意外な言葉が飛び込む。

「いえ、一時期は敬語でしたよ？」

「なんやて!？」

目を見開くはやて、ギンガはさらに続ける。

「私が陸曹に昇進した日からエイトさんは今のはやてさん使っているような敬語になりました。」

「なるほど、自分より階級が上になったからか…で?どつやったら元に戻ったん？」

身を乗り出して尋ねるはやて、ギンガは再度たじろぐ。

「えつと…ある日、エイトさんと1対1で模擬戦をする機会があったんです。しかも、エイトさんの方からの申し出でした。」

「ほうほう。」

ギンガの話を実剣に聞き入るはやて。

「当時の私は、入隊の頃からお世話になっているエイトさんから敬語を使われている事から距離を置きがちでした。でも、その勝負には一つだけ条件が付いていたんです。」

「条件…」

ギンガの言葉を繰り返すはやて。

「負けた方は勝った方の言うことを一つだけ聞ける範囲で聞く事。」

真剣な表情で言うギンガ、さらに続ける。

「それを聞いて私は頑張りました。そして、模擬戦に勝って言ったんです…」

「以前みたいに接して下さいー!」

当時の事を思い出しながら言うギンガ。

「…なるほどなあ。てことは、初めから敬語使われとる私は望み薄いなあ…」

「そんな事はないと思いますよ?」

頭を掻きながら再度溜め息吐くはやて。しかし、ギンガから意外な言葉が返ってくる。

「それ以降、エイトさんは誰かと勝負をする度にその条件を付けてますから。」

「ほんまに?」

ギンガの話に食いつくはやて。

「はい、所属や階級等も関係無しです。」

笑いながら言うギンガ、はやての顔も明るくなった。

「あ、でもあれやな、エイト君って空戦魔導師やる?よく勝てたな?」

とっさに気付くはやて。

「エイトさんは模擬戦をする時に相手に合わせますから。」

「へえ、そうなんや。」

納得するはやて、そこへノーヴェがやって来る。

「ギン姉、そろそろ始まるよ?」

「そう?じゃあ行きましようか。はやてさん、残りの話は後で良いですか?」

「うん、ええよ。」

はやてが了解すると三人は訓練場に向かった。

第10話：はやての疑問（後書き）

いかがでしたでしょうか？

もう何話が続けて本流に戻そうと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6802i/>

---

夜天の主と情報4課トリオの愉快的な事件簿

2011年3月31日17時27分発行